淡路國名所圖繪

卷之四

東京圖書館
一九 冊號
一〇 函架
類
門

10
19

淡路國名所圖會四之卷目録

福良驛古趾　福良浦
神宮寺　水神
真光寺　重恩寺
竹藤奇生　洲嵜 戎祠
能登守射切石　朝鮮佛阿弥陀
淡路真人福良麿宮　刈藻嶋
潜巖　烏帽子岩
長礁　廣石
鳴門　阿那賀浦
春日神社　春日寺
鎧崎　草香圓山
屏風岩　古城趾
圓山住吉社　八幡宮
慈眼寺　報身寺
八幡行宮　煙島 宗像社
蛇鰭　鶴嶋古城
俳師花雷之趾　干蘭盆大踊
屏風礁　猩猩礁
行者ケ嶽　海獺礁
藻卧礁　鳴門嵜
阿那賀溪　宮の端
伊比島　澳の嶋
辨天島　鵜之礁
奥御堂古趾　勝筧座禪古趾

淡路國名所圖會

從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字
故從二位慈光寺實仲卿序文
故曉晴翁鐘成著
故松川半山翁画
故浦川公左畫圖

藻文堂發兌

淡路國名所圖會四之卷目録

福良驛古趾　福良浦　圓山住吉社　八幡宮
神宮寺　水神　慈眼寺　報身寺
真光寺　重恩寺　八幡行宮　煙島 宗像社
竹藤奇生　洲嵜 戎祠　蛇鰭　鶴嶋古城
能登守射切石　朝鮮佛阿弥陀　俳師花雷之趾　千蘭盆大踊
淡路真人福良麻呂　刈藻嶋　屏風礁　猩猩礁
潜巖　烏帽子岩　行者ケ嶽　海瀨礁
長礁　廣石　藻卧礁　鳴門嵜
鳴門　阿那賀浦　阿那賀溪　宮の端
春日神社　春日寺　伊比島　澳の嶋
鎧崎　草香圓山　辨天島　鵜之礁
屏風岩　古城趾　奥御堂古趾　勝筧座禪古趾

志知川山　西路山　猪狩溪　猪狩八幡宮
山王權現祠　妙雲寺　古城趾　雩丘
烏帽子峯　讃岐岩　新羅谷　大人足趾池
揺石　仲野安雄翁　亀石　雁子崎
龍棲山　湊浦　翁媼石　感應寺渡
湊口神社　八幡宮　智積寺　湊古城
宇佐八幡宮　國清菴　定惠島　勝筧和尚碑
國清寺旧地　鑪河　聲明寺　家山
飯山　寶光寺　實弘上人墓　常樂寺
大屋　高天原　難波溪　神應寺
明山長寿院古趾　松本河　伊勢明神社　河童松
志知古城　堀部宅地趾　太閤石　徳永八幡宮
城の腰　階出邸趾　志知組橋　光明寺

畠山卜山終焉の古趾　志知川
神本驛古蹟　自馭盧嶋　幡多郷遺趾　神本八幡宮
行者ケ原　阿波井明神社　幡多川　岩淵
大和國魂神社　什宝古銅印　八幡宮阿吽石　岩淵寺
観音寺　黒目ケ瀧　長田溪　長田八幡宮
大歳社　白山權現祠　數川　感應寺古蹟
大門古趾　厩之尾　飯盛ケ隈　犬墳
安住寺　千本塔婆祭　常滑　道祖神祭
若宮　菅神社　城腰邸趾　莊田八幡宮
納等址　加地故邸　平等寺　船越邸蹟
祇園社　松月清水

福良驛故址　福良の浦の東浮上の南ハ東駅宿西駅宿の谷と云ふ是〻〻人の駅家の趾なるべし〻〻云

延喜式曰　淡路國驛馬　由良　大野　福良　各疋

又驛馬直法　淡路國　上馬　三百束　中馬　二百束　下馬　百五十束

又驛馬死損　淡路等十分ニ許損一分ヲ云云

○由良の湊より　内田千草　物部　宇原ホを経て大野ホ行程三里大野より廣田養宣立石円行寺　地頭方　国衙　八幡を経て福良ヨ行程四里蓋由良の浦より紀伊国牧田ヨ渡り熊路を経て都ホ上るこれ〻〻人の駅次なり〻〻云

又明石の瀬を渡る時ハ石屋より素馬志筑平安廣田ホ〻〻夫より養宣立石八幡ホ前ホ同じ街道ヒ福良ニ至り阿波国撫養ヨ渡る又南風の時ハ波立なり撫養の港口を塞ぐゆへホ阿那賀の浦より鳴門の西を定法なり

福良浦

當国の南の隅より港中廣く〻〻諸船を泊るホ便よし〻〻又国君の行邸なり

此湊ハ前後ホ山岳相對し海口ホハ煙嶋洲嵜あんど列り中間ハ恰も湖水の如く

此より阿波國板野郡撫養ホ距る海程三里の渡アり〻〻終日渡海の船出

入る事絶間なし〻〻さる程ホ渡口ハ船宿旅宿軒とあるべ内町ホハ工家商家建

列り濱辺ホハ漁夫の家多く裙帶菜を鳴門の海ホ采り海鹽を漁り五万米

〻〻又ハ干鰯或ハ鰒〻〻其余諸魚鬻るものなし〻〻別し海参の鳴門濱庶乾の

裙帶菜は他に類ひなく風味あり又干浮まは鹽竈にて烟と立漁まは鰮引船の漁火と燒あんど民用の助けあり浦の風景と添るのあり凡市坊家數七百餘戸良より坤に續き長さ十町余乾より巽へ幅二町ばかり家居相續く市坊大抵三條山をふかりを上町といひ海濱ふあるを下町とも

一書に云柳當浦の溪は東西一里ばかりの入海にて向方十余町あり山にて峯重つゞく峻しくして柏樹緑あり四季の詠め絶ぐ山の尾峯谷ふかくを殘迫きふ家居をるにて朝の烟立のぼり日ふ映ぜるを見て況勇ましき霧より〳〵ふ晴行ば小船をぞ〳〵出來り小網引あり釣をなすあり或は國々へ通る船入にて出あり家々の印あり立て行違ふ舟のひきにれば水鳥群來る浪間ふ浮沉める眺めあり岸に望めば左に丸山八幡山右の方に煙島森のこゝ少し南ふ別嵩嶋蛇の鰭鴉は阿万山にひとそへり煙島の後に鶴島の古城蹟苅藻島行者嶽戸嵩の鼻は鳴門にのぞみ怒れる涛の光景は言の葉も尽しがたし遥に望めば雪の如く白砂ふ墨流せるごとく松の生茂りこゝ

門別むやの川にあり山に城地の辺りまぐ〳〵委〳〵見へこゝにぬきでふ夕陽山を照らせば黄葉さへに紅にあり暮ては一家の燈〳〵幽ふ寂寞とこゝにうれと催せり沖に漁火の波に漂ふ中ふ網引の聲聞ゆれば程なく櫓ぎ〳〵響かし来る魚取の帰りあり濱に松明炎々として市にする声かまびすし月澄のぎとば漁火もあるみをゝ金波滄々とこゝ山づゝにうちに世外の思ひとあせり云

圓山住吉神社 福良浦市坊の東にあり社頭の山上より内海を眺望せば島々の光景絶勝なり例祭六月廿日

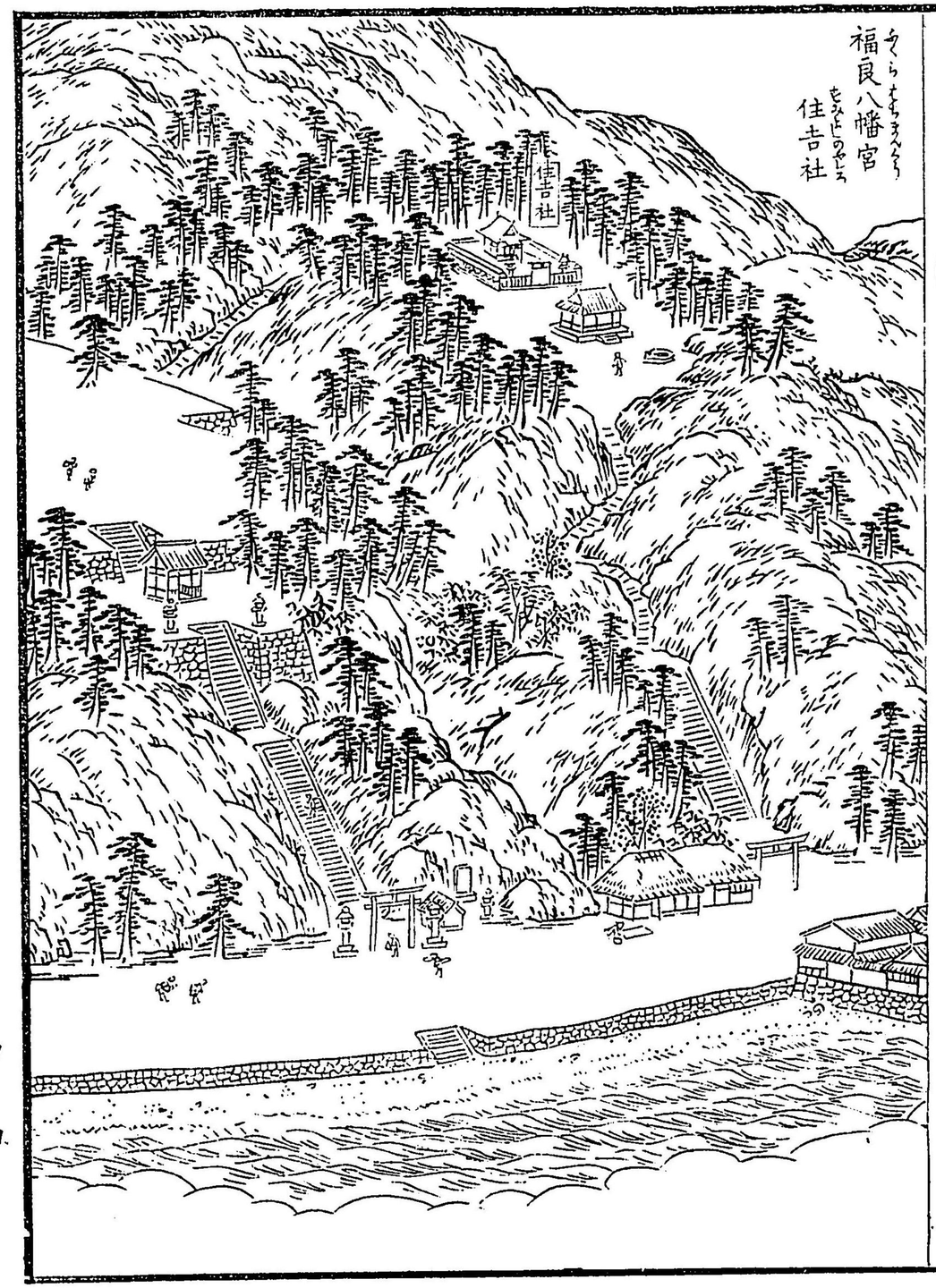
八幡宮 右円山に並び山上にあり境内廣く宮造美あり例祭十一月十五日神輿渡御あり當浦の生土神とす 社僧神宮寺

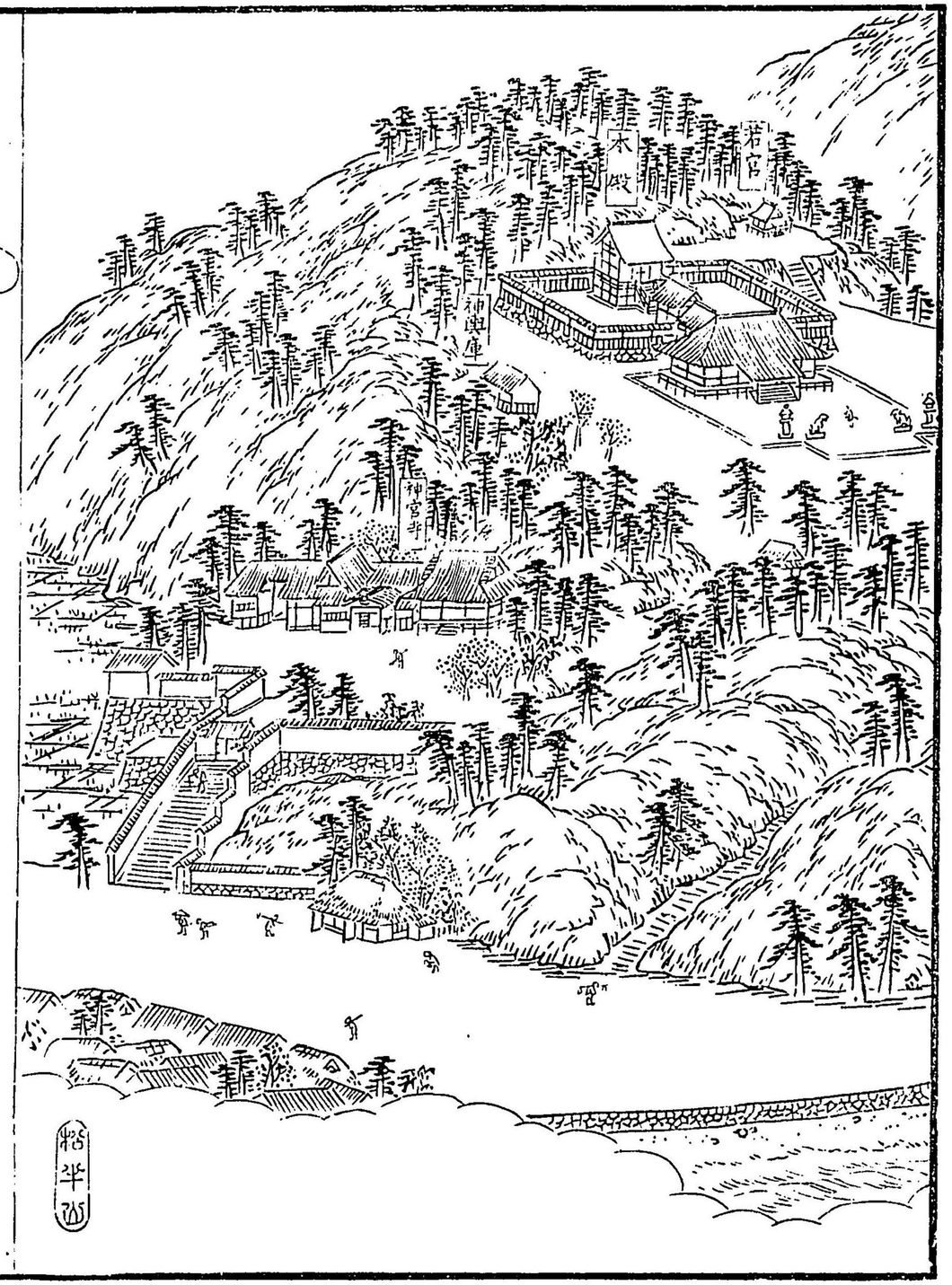
神宮寺 八幡宮の西隣にあり万年山照雲院と号す旧名和光山と号せ〳〵ぞ 別當神宮寺

水神 同浦の東海濱にあり〳〵丹生明神の社にして加集山に接するひく今八幡村八幡宮の摂社と崇ひその旧地なるを以て今尚水神と地名せり丹生明神は則ち水神なる故なるべ〳〵

福聚山慈眼寺 同市坊の中ふあり〳〵山の方なり真言宗龍華院と号す

寺記ふ云當山は觀自在薩埵靈應の地なり〳〵鳴門の海中より出現し給ふ尊像なり其由来を尋るに往昔當浦に宥智沙弥と号する奇異の道人


福良八幡宮
住吉社
住吉社


若宮
本殿
神輿庫
神宮寺

ゆゑ恒ふ塵芥と厭ひ専ら菩提と求め佛乗と尋ぬ修練〜遠近の里と巡つ〜托鉢〜鹿飯と爨き〜生涯と資け終ふ草廬を結んぐ勤行おこたらざれば此ふ一年の夕海中より高僧来つ〜無比の尊體とふ〜と夢見る事ゆゑ翌朝宥智沙弥その徒ふ語る〜曰前夜奇異の霊夢を蒙むるかかるべく今日佛陀の尊像と得べ〜と言ひも終らざるに感傷やる十一面の尊容鳴門の澳ふ漂漾し奇々る武奥大士龍宮城より涌出し給へ者うと沙弥合掌〜〜禮拝〜実ふ夢中の佛勅割符と合はゞ如くゆゑと数回感嘆せり尓〜〜後奥尊像と當寺ふむかへ以来寺号と龍海寺と称ぜ斯星霜を〜稔り仁治四年の仲春高野山の古哲道範阿闍梨本末の議論ふ依〜讃州ふ配流の時當國繪島の磯ふ着岸〜稍〜此津ふ泊る不図暴風怒號〜〜濁浪空と凄ぐ是故ふ當山の觀音ふ請〜て天氣の晴和の祈念ゆゑに忽ちふ其霊験ゆゑ翌日阿州の姫田ふ到りぬ〜時人ひまく佛力の深妙と感ぜ然ゆゑに阿州姫田の庄ふ瘡瘡と病〜其貌醜き者ゆり其

父母悲歎の餘り医師を招き〜〜良薬を乞ひ緇衣を請ぐ〜加持を受〜〜いへども更ふ験ゆること少〜病者い其身の悪業を愧て身と海ふ沒せんと欲ゆ此時其村長告〜曰此頃一僧有て道範阿闍梨と号ゆ近日淡州より来て此地ふ留り嘗〜予ふ語て曰淡州福良の龍海寺ある観音い奇瑞殊妙の薩埵ふ〜〜定業と能轉ぜるの尊体ありとされば彼の津ふ渡り〜祈念せば平復まさに速うあらんと病者い其教ふ遵ひ日ゆゑ當浦ふ渡り来つ〜観音の宝前ふ三七夜参篭〜〜大慈大悲と念ぜる程ふ其満ぜる夜夢中ふ白髪の老翁来つ〜忽ち杖と以〜其頂と打と見て覺うゝぶ則ち病ひ平癒〜〜回復〜〜るぞ奇異あり且厄難厄災と除〜〜勝計ふべ〜〜又寛永十四年春嵯峨宮二品尊性親王阿州ふ下向〜〜ひて鳴戸御遊覽の時住僧宥弘御宮ふ謁〜當寺の盤觴と告奉るよう末寺号の令旨と賜る此時改め〜福聚山慈眼寺と号ゆ是慈眼視衆生福聚海無量の金言ふ因〜〜ゆゑ也〜云云

報身寺　同所ニ坐シ浄土宗　智光山遍照院と号ス本尊阿弥陀佛　鎮守　菅神　金毘羅神とあり

真光寺　同所ニ坐シ一向宗西流　湖長山と号ス本尊阿弥陀佛　元文中火失て古記ハ灰燼とす

重恩寺　同一向東流　南林山と号ス本尊阿弥陀佛　什宝ハ紺紙金泥古筆の経巻と珍傳ス

八幡行宮　同浦の西の山の方ニ坐シ例年八幡の神輿此所ニ渡御あり小社あり俗ニ牛王殿と云ふ或ハ武部宮社と云ふ

里老云阿万城主郷の備前と云ふ人あり細川の氏族にて阿万郷ニ居住ス故ニ郷氏と称ス嘗て沼島の住人梶原氏と襲ひ伐んとせしが謀洩て かへつて梶原より逆寄にして阿万城を攻られしが郷方兵ごけて敗軍ニ及び終ニ大将郷備前ハ唯一個城を拔出て阿萬河内の僧房ニ隱れぬ時ニ寺僧了海の曰此所ハ敵地ニ近く蠻を為ニ便よろしく福良の浦ニ遁れ行べし容易ハ探し得まじと郷実もと諾して福良の浦里ニ潛ひる然るに梶原探索して急あり程ニ福良の浦人後難を恐れ告て是ニより郷ハ遁て道ニ終に自裁せ先ニ臨て浦人の不実なると怨て怒て沒ス其年大ニ疫癘流行して里民先ニ死ること是正しく郷殿の祟りなると里俗おそれて祠を嘗て其霊を慰て憤りと宥めりと故ニ郷殿の社と称ス今の牛王殿の社これなり

仲野安雄翁按云此傳説誠ニ事實なるべし一故事ニ備へ然れども傳説の如くなれば憂先しる窮將の昊を祀る祠前ニ八幡太神の鳳輿を駐め奉るべきにいひ因て思ふに牛王殿と郷殿と音訓相近きを以て混同の誤なるべし

されば郷殿の自殺の趾ハ別ニあるべし牛王殿の地と異なるべし

一説ニ牛王殿ハ平人牛王寶印の神符を製して施せ亭舍の趾なりと云

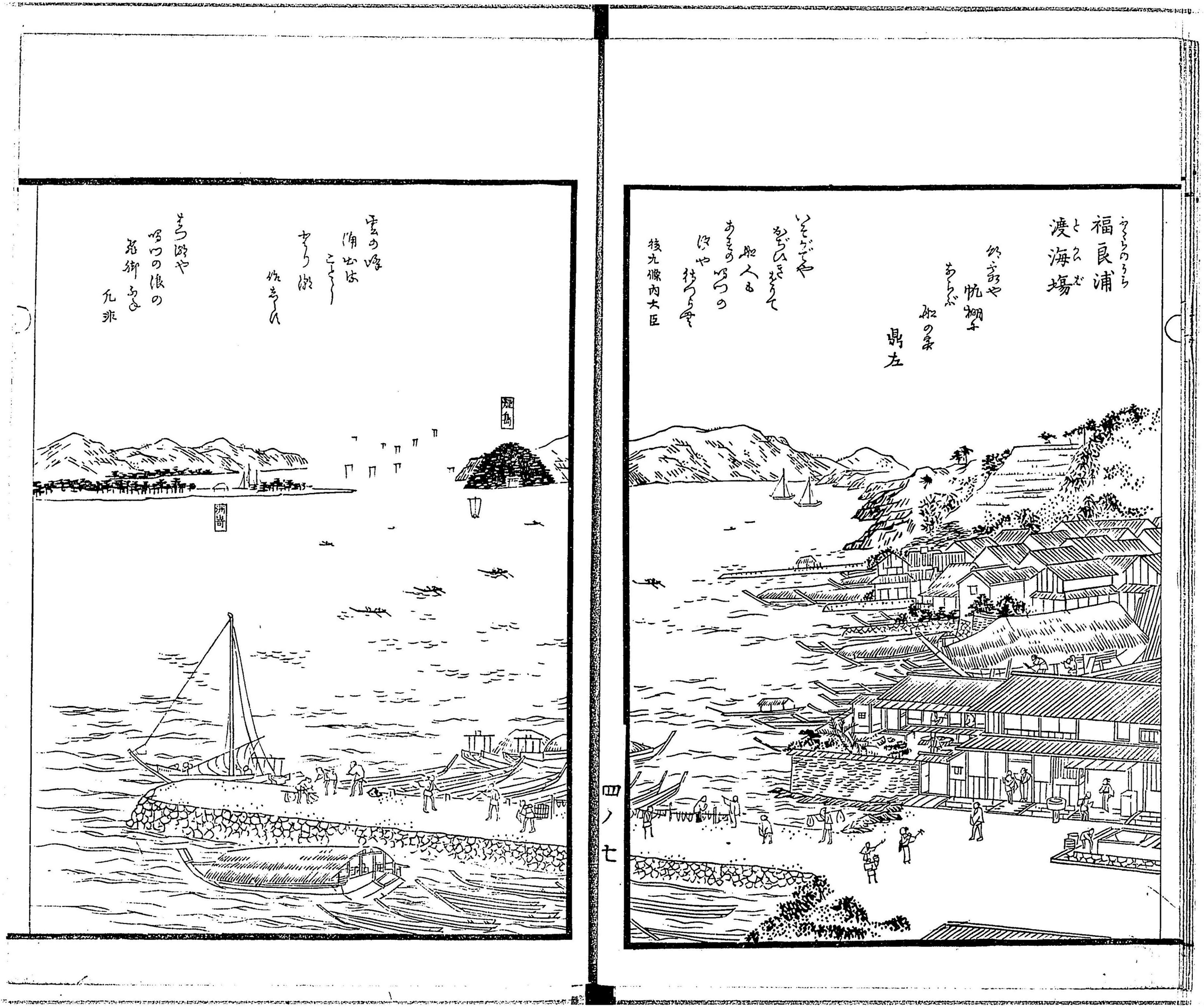
或云牛王殿の社の傍ニ古墳あり其中ニ天文年中及び天正九年四月七日の文字見へたり天正九年ハ郷氏の石碑あるに今も四月七日を以て祭るを心得べし

又阿万ハ此窮將を郷丹後守重朝と言傳ふと云

煙嶋　同浦の洲崎の西ニ坐シ小島あり緑樹翁鬱として島の上ニ宗像の社あり俗ニ辨財天の社と云或宝珠島と云高さ直立凡十間許周凡一町許

嶋の頂き平地凡五間ばかり宗像社坐り此南ニ石小祠坐り里人これを無官太夫敦盛の古墳なりと言傳ふ

一説ニ元暦元年春二月摂劔一の谷の合戦ニ熊谷治郎直実平家の公達無官太夫


福良浦
渡海場
帆柳
帆の柔
鼎左
後九條内大臣
雲の峰
角山は
佐多御ふる
九非
畑島
洲崎

敦盛と撃ち其遺體を父経盛の陣に送る其時此島に於て茶毘し煙ありしを是より〳〵煙島と号く亦後菩提所を営み摩尼山紅蓮寺と号く則摩尼の島の宝珠とかや紅蓮は敦盛の法号なりといふ

又云紅蓮寺後世廃〳〵本尊観世音の尊躰は今神宮寺に安置ぬ是こそ

按に洛陽新黒谷紫雲山光明寺に敦盛の碑あり石面に書〳〵曰

空顔璘莊と云り紅蓮の法号いぶし〳〵後人尚考ふべし

雨〳〵ぶる若葉青葉やうつり島　蝶夢

竹藤　右煙島の林中に繁茂して大樹に巻まとひ其花葉も亦尋常の紫藤に異なるとぞ　其蔓は竹のごとく節の形ちあるもの本末共に太き幹より細き枝に巻きまとひ節ありて実に無双の一奇といふべし

洲嵜　同煙島の東の海中にあり〳〵づけり軒より巽に向ひ長さ三町余良り坤に向ひ一町なり地上に白砂〳〵柏樹蒼々と列〳〵生て其勝景愛すべし

里老傳へ云洲嵜より阿万の下角といふ所へ續き〳〵小松並び立うつくしいふ然るに天の橋立の景色に彷彿たる勝地なれば有名なるべきを平家の公達の爰に船を浮べ〳〵詠じあひしとや古くも話に残れり

一説に天正年間地震の為に蛇鰭と洲嵜の間きれて海に落入りしといふ

蛭児祠　同所にあり

蛇鰭　同洲嵜の東の海濱の山に〳〵長く出る白濱あり

鶴嶋古城　或絃島に作る烟島の西にあり海面一町許を隔つ鳴の地方より南へ〳〵出る岩山に古墨の頂き平五六所高き所東西凡十八間南北七間同東の凡東西三十一間南北七間同東凡東西五間南北間同東の端の凡東西間南北二間半又本凡の西に二段あり各五間三間程本凡の直立二十三間東の端に十間東西長四町余南北の幅二町余西南各懸岸

当城は源平争戦の時六條判官為義十一男加茂冠者義次同十二男淡路冠者義久志を義経に通じ籠城に壽永二年能登守教経兵船十余艘を従へ攻寄せるに義次敗軍して討死し義久は泉列吹井に逃遂に教経の為に討れ義久の子若狭冠者義邦建久二年福良に阪に住を子孫福良氏に改む嘉吉の頃福良石見融通りて長禄の頃藏人大夫政貴あり文正の頃勘解由左衛門政幸あり同時に相模守義基の時城を去り細川成之に属し阿刕撫養に住し子孫阿刕にありといふ

平家物語云平家一の谷へ渡し後は四國の者ども一向随ひ奉らざる中にも阿波

讃岐の在廳等皆平家を背き源氏に心を通ぜるが流石昨日今日まで平家に隨ひ奉るに身の今日始め源氏へ參らんとも用ひ給はじ平家は矢一射うけ奉るべき夫を表にて門脇中納言教盛越前三位通盛能登守教經父子三人備前國下津井に在りと聞き兵船十餘艘にて寄せ來る能登守大に怒り昨日まで我等が馬の草苅る奴原が何しか契を變じるぞ有んと其義なくば一個も洩さじ討やとて小船ども押浮べ追ひ來れば四國の者ども人目ばかりに矢一射て除んとおもひしに能登殿は餘りに手痛く攻られ奉て叶じとや思ひけん遠眉にて引退き淡路國福良の泊に着にけり其國は源氏二人ありと聞きて故六條判官為義が末子加茂冠者義嗣淡路冠者義久と聞へしと大將は頼て城廓を構へ待とあるに能登殿押寄て散々に責るに加茂冠者討死し淡路冠者い痛手を負て虜にせられ給ひ残り留て防矢射る者も一百餘人が首斬うけさせ討手の交名記て福原へ參せられ云云

常磐草按云系圖には義久と義季とあり又曰鶴島の墨址その履歴詳ならざれ思ふに足利爭乱の世に福良氏の人ぞ居住せしあるべし福良は住する郷士なり嘉吉中に福良石見ひろ長禄中に福良藏人太夫政貴文正年間は福良勘解由左衛門政幸あり又福良安藝守ぞひろ委き事は不知云云

能登守射切石　右古城の海岸にあり傳云鶴島の城と能登守教經責られ一時弓勢の程を敵に見せんとて此石を射切るに殘辺に立る大石半ばに折るとあり高四間許切口の尖岩は凡十間ばかり隔て山手の方の岩は交ばかり切る凡五尺長さ八尺許ばかり

九日　登鶴嶋故城

壁立故城臨海高　重陽登得倒樽醪　讃阿山色天晴朗
洲島松聲秋怒號　樹裏千兵猶乱雁　洋中萬馬認奔濤
恨他戰畧輸平將　埋没當年幾箭刀　睦齋

朝鮮佛阿弥陀　同浦平瀬某の家に藏る立像長九三尺許傳云遠祖平瀬十右衛門なる者朝鮮の陣に供奉して一時携へ帰る所の尊像にて其験新なり往昔此浦細屋町の列軒失火ありて焼亡の時は西風烈しく共家危ふかりしに此家無難に除れば是全くあの佛の奇瑞なりと言傳へ又古代の織物なりと珍藏に

同浦岡田氏所蔵
国君元和元年大坂
御在陣の時賜ふる
所の尊句之写

元日　号緑

ようそいろ〳〵老の坂てを〻幸〻　仲

日

きよふりや世よめたらうの屯のまち

日　雑れ

年ありや舞てゆくもの四海

元日　立春新年

えり

山もけさかすむや東西の海

雪仙ノ紙ハ〻〻ノ

雪なるも面〻〻梅じ〻〻

ちよ〻〻ろ〻〻ゆ〻〻

西月わりあて

宗樹記

至鎮朝臣ハ国君ニ
宗樹ハ阿府の士牛田氏の
遠祖ニ
東雲ハ岡田氏の遠祖ニ
又
忠英公ヨリ賜ふる描金の提重
一組此家ふ珍蔵を
尚此余古書許多と蔵ル事
繁くれば畧之

俳師花雷之跡

同浦ハ花雷の字後ハ未ハ改ひ土師氏諱大彰府下火器隊某の養子とあるを多川与助と称ス後致仕〻故郷ハ飯り十一屋辰五とよぶ俳諧とあのゝて京師及び浪花ふ寓居ス故ハ都浪淡と号ス享保中駿河の白隠和尚遠州見付の駅見性寺〻〻物讀〻ふ時武蔵の嵐々ハ所と過り相見〻ふる折〻〻床ハ蓮の花と投入〻置れるを挨拶ハ一句と吟〻〻れば和尚服ひて年と越〻津の国ふ淡〻第三と附合後国々の好士へ〻〻歩ひ七十二候ハ六句筆と加へ〻〻満尾〻〻ひと淡列ふ

道元記
東雲

〻〻ハ花雷の句ひ〻其句ニ云

眼中の童子ハ牛の角ふ字と幸〻
扁菓の野飼ハ青草とふまを

脇句

乗るあり〻〻楽ふ見へ〻も蓮の上　武蔵　嵐々

第三

三界無一安猶蝸牛　駿河　白隠

うゐれ女の彦抱く也ハ生伸〻　摂津　淡々

掉さ〻〻筏も水の曲と形　淡路　花雷

掛さ土瓶ハ市便と待　阿波　来雪

六十六ヶ国の内日向大隅のみ句なし大和土佐ハ二人と加ふ

教經が弓勢
磐石を射切

貞幸画

花雷寛政三年癸五月廿五日 享年八十ゐ〳〵殁そ

法諱 都浪淡花耒斧鋏居士

辞世云 冨士芳埜一度ゐ清つゐ〳〵ぎん

又一句 婆婆〳〵地獄の釜ゞ尻ひぶ焼

此句有〳〵後尚生死〳〵ゐのうと云

干蘭盆會大踊 同浦にゐる古代よりの定例ゐる〳〵其式ゐる〳〵厳ゐる其光景万事古風ゐ〳〵他の踊ゐ異ゐる世ゐ福良をゐ〳〵〳〵一奇〳〵

淡路真人福良麻呂 同浦より出さゐる人ゑどん乎其事蹟未ゞ詳ゐゞゐとゐゞゐ国史ゐ見へゐると以〳〵ゐて出に後人尚考ゐべ〳〵

日本後紀云皇統彌照天皇桓武延暦十八年六月巳丑従五位下淡路真人福良麻呂為少輔 同大同元年三月壬午従五位上淡路真人福良麻呂云為山作司云

刈藻嶋 同浦大ゐるもの磯より一町ゐゐ〳〵ちゐれ海中ゐゐる小島ゐゐ俗ゐ沖の刈藻とゐゐ或ハ大園ゐゐゐ松樹生ゐ奇石怪岩ゐ〳〵則鶴島の古城の西四町許ゐあゐ

此嶋の周凡七町高さ八間ゐゐゐ南北へ長く東西短〳〵古老のゐ〳〵〳〵當嶋の古名と王園とゐふハ壽永の頃平家の一門一の谷落城の時公卿軍船ゐゐ

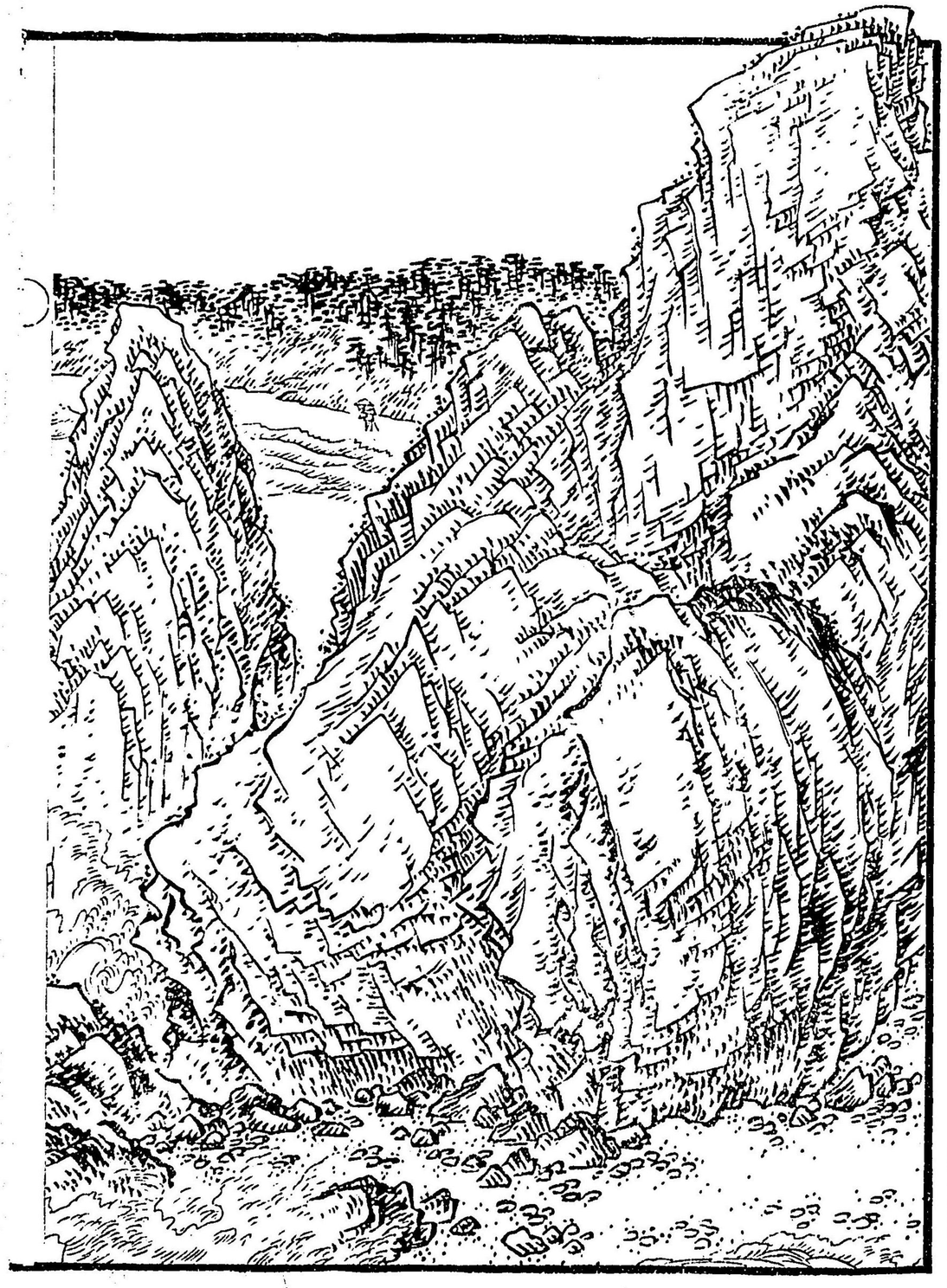
撫養或ハ讃岐の地ゐ漂ひゐゐ〳〵淡路の洋ゐよゐ〳〵浮れ給ひゐゐ〳〵ゐ安德天皇と守護ゐる御船此島ゐ泊ゐゐゐ〳〵島ゐ上りて宸慮を慰め奉り〳〵ゐよゐ王園と称ゐゐ〳〵ゐと称ゐゐとゞ或ハ云ゐの嶋を古くハ遠の島と称ハ是正〳〵〳〵自凝島の畧語なゐゞ〳〵公望私記ゐおのころ嶋ゐハ自ら凝ゐの義なゐ今淡路島の西南の角ゐ見在ゐる小嶋ゐ〳〵俗尚其名を存ゐゐとゐ〳〵ゐゐんと是又一理ゐる小似ゐゐ然ゐゞも自凝島の説ゐ〳〵〳〵ゐ〳〵〳〵事實詳ゐゐゞ後人尚考ゐべ〳〵

屏風礁 同島の岸ゐあゐ 握々礁 同沖の方ゐゐ

滑岩 大荒濱の谷口より岸の下ゐ磯取ゐ通ゐ海辺ゐ〳〵〳〵大磐石ゐ穴ゐあゐ〳〵東ゐゐ西へ通徹ゐ所謂石門ゐゐ洞中の廣さ三間四方ゐゐ高さ凡一丈余穴道ゐゐて人馬往返ゐる小難〳〵ゐれバ行人ゐ石中ゐ暑ゐ〳〵〳〵寒風を凌ぐゐ便りゐ〳〵実ゐ海辺の一寺ゐゐゐ

鳥帽子岩 ゐゐ岩の南の磯ゐゐゐ高さ四間ゐゐ其形ゐゐ〳〵名く

行者嶽 同砥取村の南ゐ出張ゐる峻崖ゐ〳〵〳〵高サ七間許絶頂宝形造りの小堂ゐゐ役行者ゐ安ハ例年六月七日ゐ諸群集ハ南の岸の上ゐ石の不動尊あゐ



くりいも
潜岩

行者嶽

此嶺より鳴門と眺望せば眼前ゆ〻く白浪岩と砕く光景美観なり
相傳へ曰往古役の小角鬼神と駈使し〻共山岳を来り鳴門の海の逆まく
浪険し〻舟人の艱りと憐み阿波の間と陸路とせんとて祈られるゆ数珠
と貫る緒の達磨の間より断へ乱を落られば其功成ざ〻〻止ぬ是千載の
遺恨あり〻〻ぞ

海獺礁　行者が嶽より東の方の海際にあり　長礁　行者が嶽の南へつゞく大岩なり

里老云行者が嶺と潮嵜の端と吹上の小濱の鼻とハ俱よりひ合〻て行者が嶽ハ
多の方ゆ小濱及び潮嵜ハ距支三十町許小濱より潮嵜へも又卅町餘〻

廣石　鳴門嵜より一町ばかり東の方南の山際海面に對ふ大石〻て山に添てあり廣さ凡十町ばかり高十四間ト云

藻臥礁　鳴門嵜三ばかり高サ一間半ばかり西へ出ばりある岩なり

鳴門崎　行者が嶽より西の方へ突出る事凡十町余馬の脊の〻〻厚さ一町に過ぐ福良阿那賀等の間にあり〻〻所謂當国の端あり或ハ飛嵜とも又ハ戸嵜とも

此地ハ淡路國の端ゆ〻て阿波國板野郡撫養孫崎の鼻ゆ對ふ其中間
所謂鳴戸ゆ〻〻向ふハ阿波の飛島裸嶋とぢめ網干島大毛の孫崎

里の蜑の磯嵜ゆ眼前ゆ〻く南と望めば椿泊の湯嶋紀伊國の日の御嵜
北ハ讃岐路小豆島等見えゆ〻〻風景殊に絶勝あり

鳴門　阿波の国界にあり彼方ハ阿波国板野郡撫養の浦に属し此方ハ淡路国鳴門嵜なり

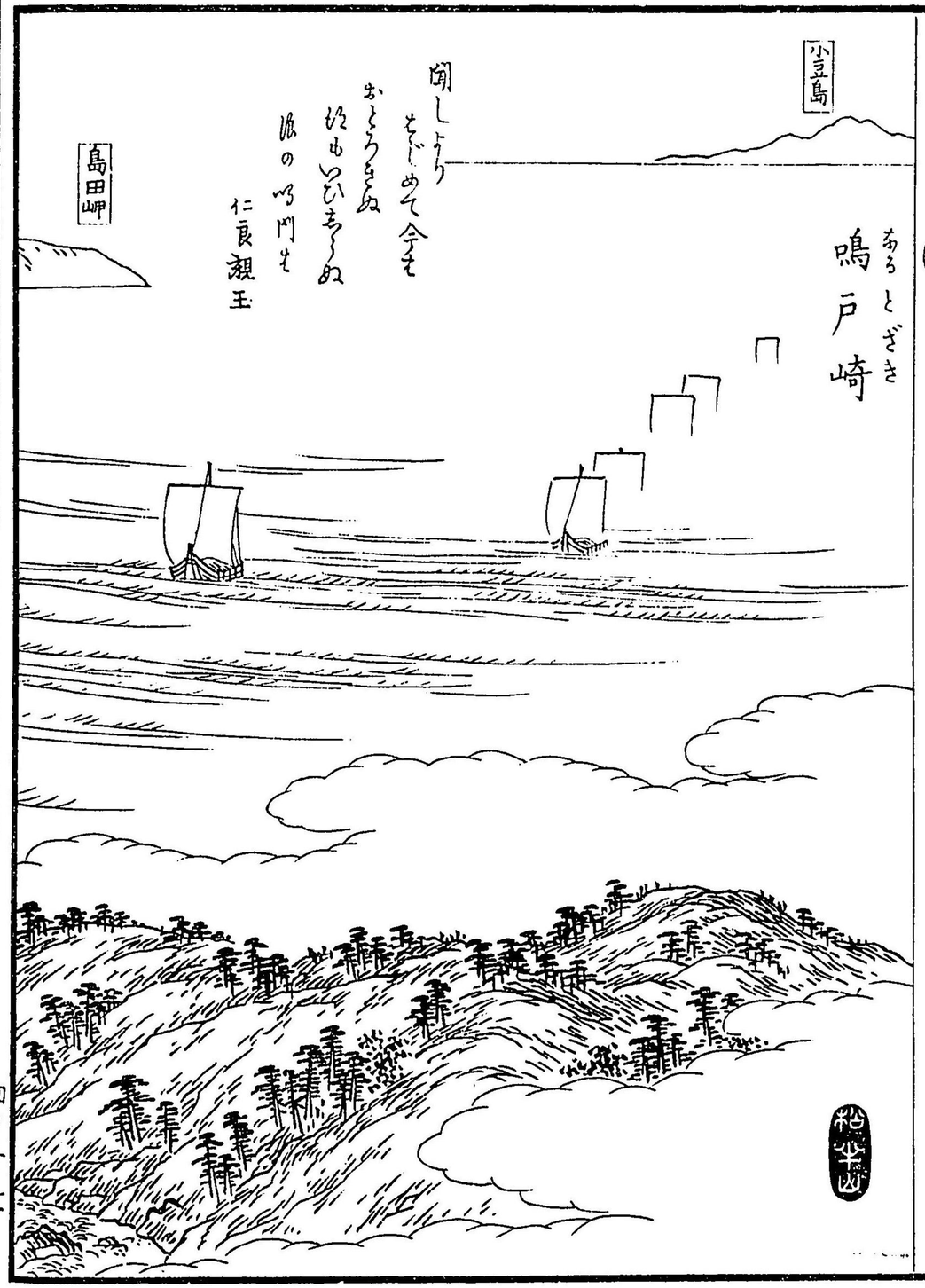
抑此鳴戸と云ハ阿波淡両國の界ゆ有〻其間十有餘町中間ゆ巖石峙ち
〻〻是を中瀬と号ハ長百三十間横五十間　鳴戸嵜より此中瀬まで凡百
三十間ばかりこれを小鳴戸と号し深さ七尋に過ぐ其左右一町程ゆ〻れば
八十尋或ハ九十尋の深さ〻〻ある中瀬より孫嵜の鼻まで凡五百間許
此間を大鳴戸と云ハ深さ四尋に過ぐ是より南飛島の辺に〻れば深さ
百卅尋北の方ゆ〻〻ハ八十尋余に及ぶ満潮に〻ハ北に行〻孫嵜の乾ゆ大
渦ゆり千潮に〻ハ南ゆ取〻飛島の南北に大渦生ハ又汐ぢゆ小渦ゆり〻〻
投ふべ〻〻ば都〻潮の盈虚〻〻ハ此迫門にせまるが故に水勢激〻〻る磐石
の轉ぶよひ〻〻原未海上ゆ高下ゆ〻〻甚〻き故干潮の時ゆ〻〻り〻
高き方より落る水瀧の如〻潮満る時ハ瀬に〻ゆ〻り〻起り五怒濤雪の

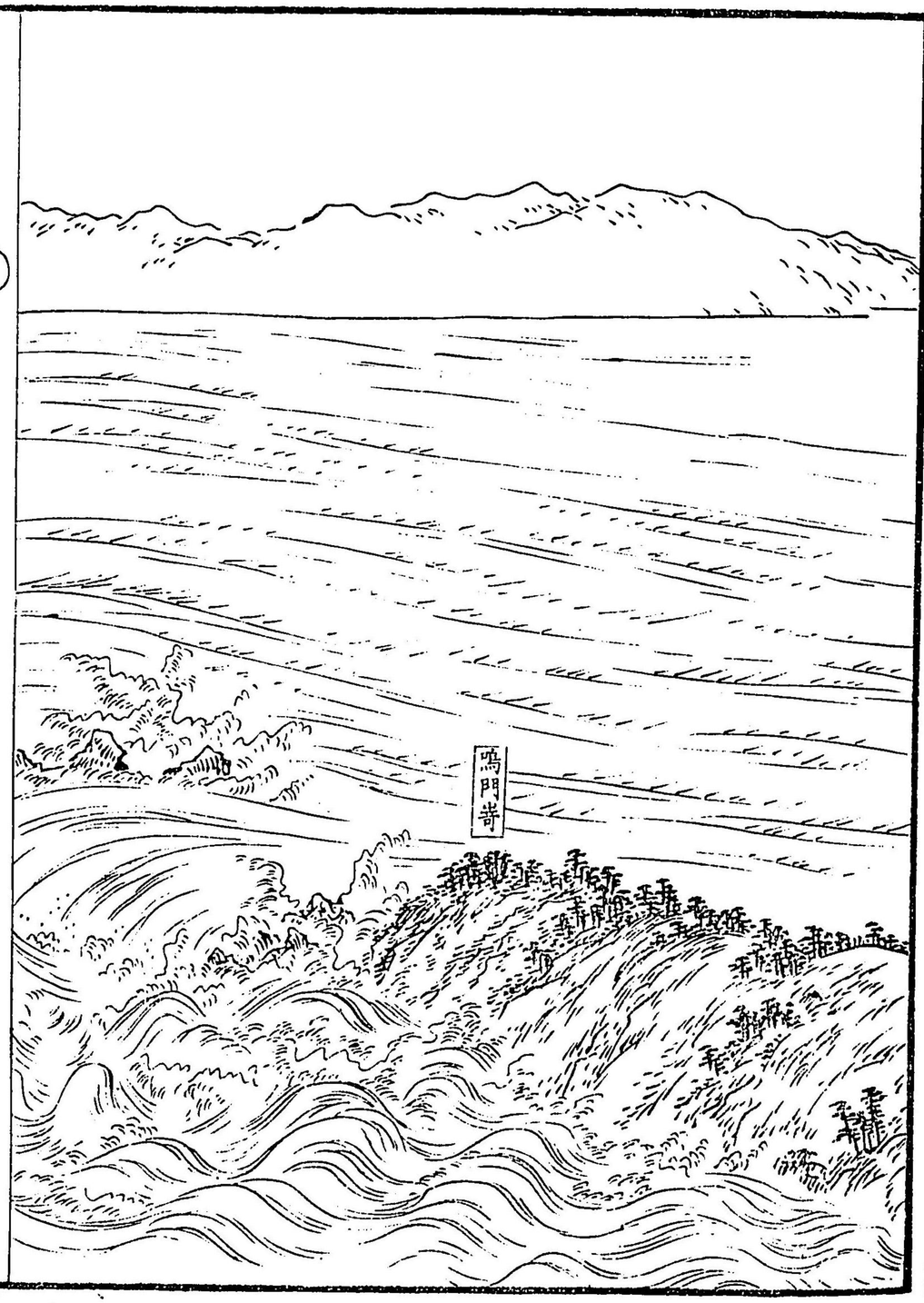
積る山岳まひ〳〵落るべ盤渦震動して汐そぢの勢ひ大河の早瀬
ふ彷彿〻〻斯常に鳴ひゞくゞ故ふ鳴門と号さる乎尤潮謐る海平うゝ
ぞれゞ舟船ゝと渡るゑ難し又順水〻〻潮和うある時ハ海士も小舟ゝ
よせ〳〵釣とられ貝と採藻と苅ゝ数ゝ磯曲ゝ嶮岩奇石畳列て
風景最奇絶〻〻尋常の盈虛ゞに則る光景殊更晩春の三日の汐干
ゝ其凌競ゝと言語ゑ絶ゝ実ゑ扶桑第一の迫門とゝ〻べ
按ゑ迫門ハ海の左右ゑ山ゝ〻〻其間狹く夾ゞ故ゑ水迫り〻波涛〻〻く
底と穿ち〻水最深く淵の如くあるゞ故ゑ盤渦ゝと常ありそれゞ鳴門ハ
就中迫門の甚〻〻しきゝ其上海原ゑ高低ゝり〻波涛高きふ的り
低きふ高るふゝり斯の如き形勢をゝ所謂海内無双の難所なり

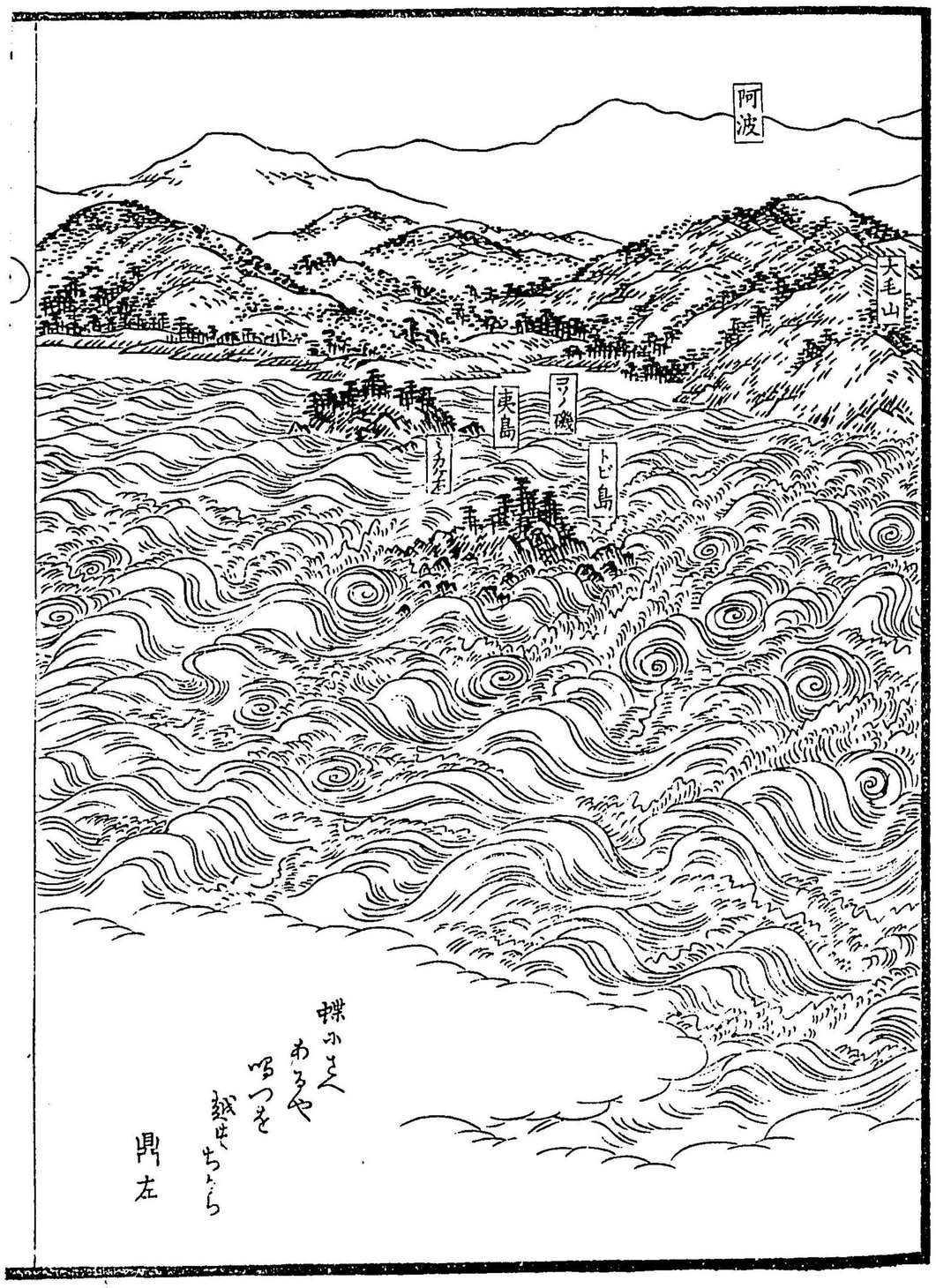
鳴門記

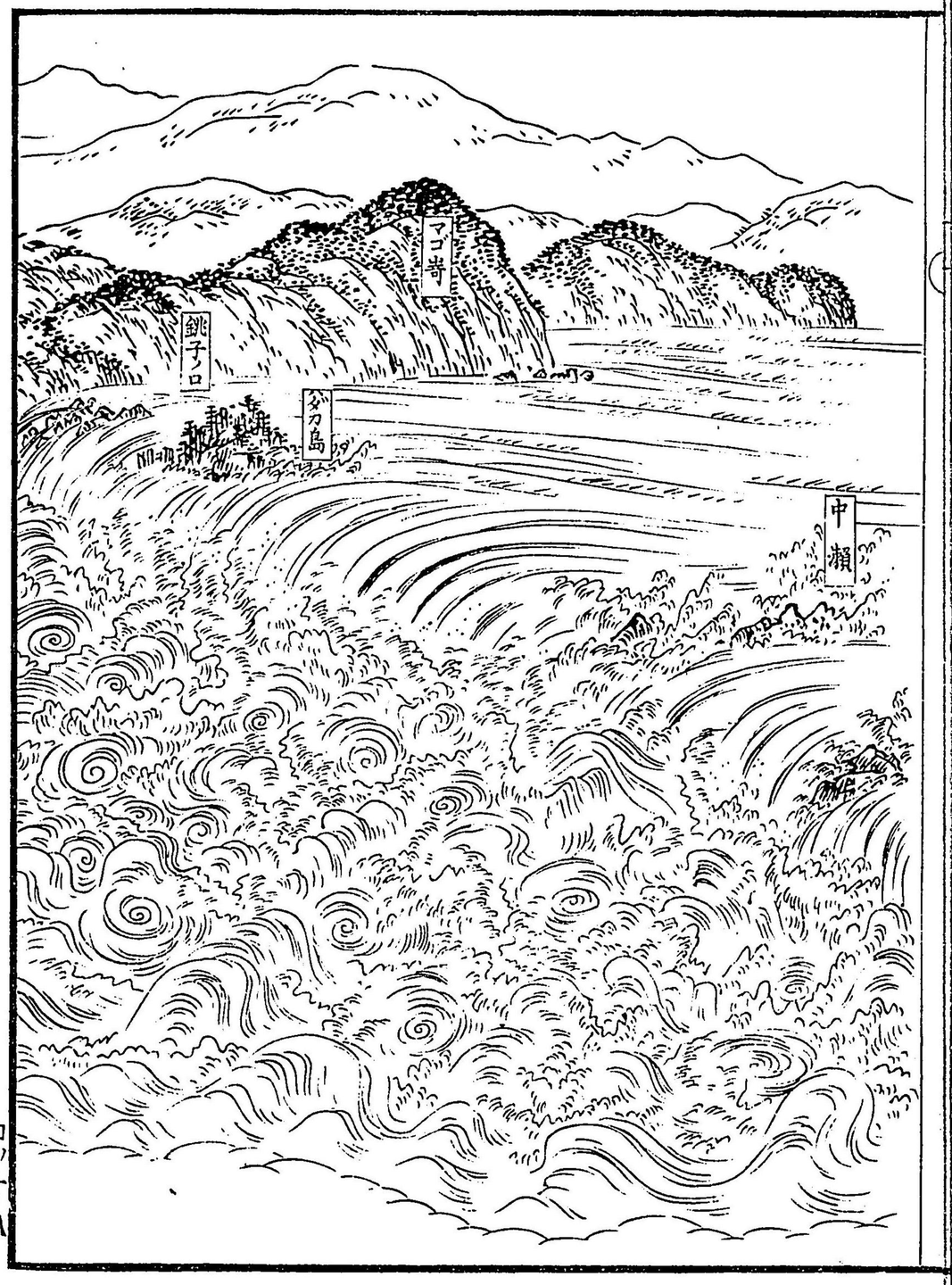
名〻ゝ阿波の鳴門を南海の一名速吸名門とゝや扶桑第一の海門
風景〻〻〻〻海ハ東南ゑ流れ〻〻百里ゑ餘ゝり其潮筋の

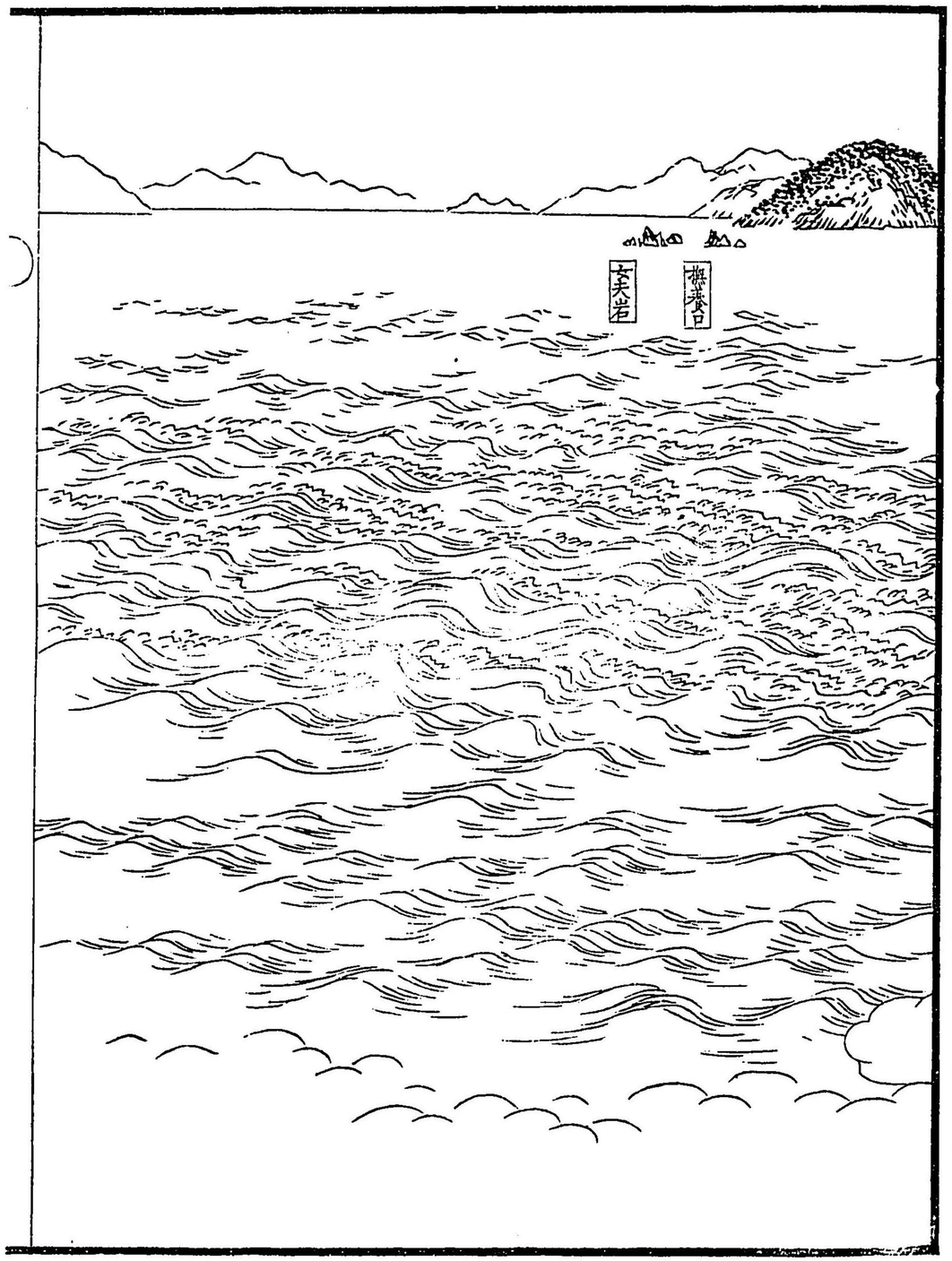
ゝ〻〻ゝ五十三筋ゑ別れ〻〻迫きハ沼島ゑ〻〻紀の海ふ
ゝ〻ある潮の早きゑ鯨の百川と吸ゞ如し北ゑ臨める向ふハ淡路島
行者ゞ嶽象ゞ端ハ東南ふ聳へ此方ふ裸島ゝ〻ふ峙ち広間絶ゑ十八町
〻〻〻と見也眼前の見ゝ〻〻〻瀬二十町ゑ過〻〻〻や其中ふ中瀬なる
岩〻〻〻〻水底滑床の磐石半腸の〻〻生ゝ〻〻潮の落るゑ恰も
百千の雷のひゞくゞ如〻〻る程ゑ渦〻〻〻〻潮の盛んなる時ハ
風帆と後ゝ由ゑ走ら〻む是と鳴門の逆落〻〻とゝふ渦巻汐の勢ふひゝれ
くハ飛鳥も忽ちふ溺ゝゑ眼前ふ〻〻〻言も〻〻〻ある飛島のゞ〻〻ハ潮の
満干ふ風景と変〻陰晴ふながめと異ゝ〻〻其満る汐ゑ應〻〻〻涌〻〻ゑ北ふ
増流〻福良ゑ〻〻ゝ引潮ハ東南ゑ逆上て暇〻〻満干の壇となせり其
高低凡十有餘丈とゝや潮の東北ゑ及ゞ三里け〻〻〻〻して深きゑ百餘
尋ふ〻〻れり渦ハ業の荷葉ゑ似〻〻〻浪ハ岩ふゞけ〻〻梅花の散ゞ
〻〻〻中略穏ゝある時ハ海面渦と布〻〻数千の帆舟風ふ逆ゝ〻〻引〻景色

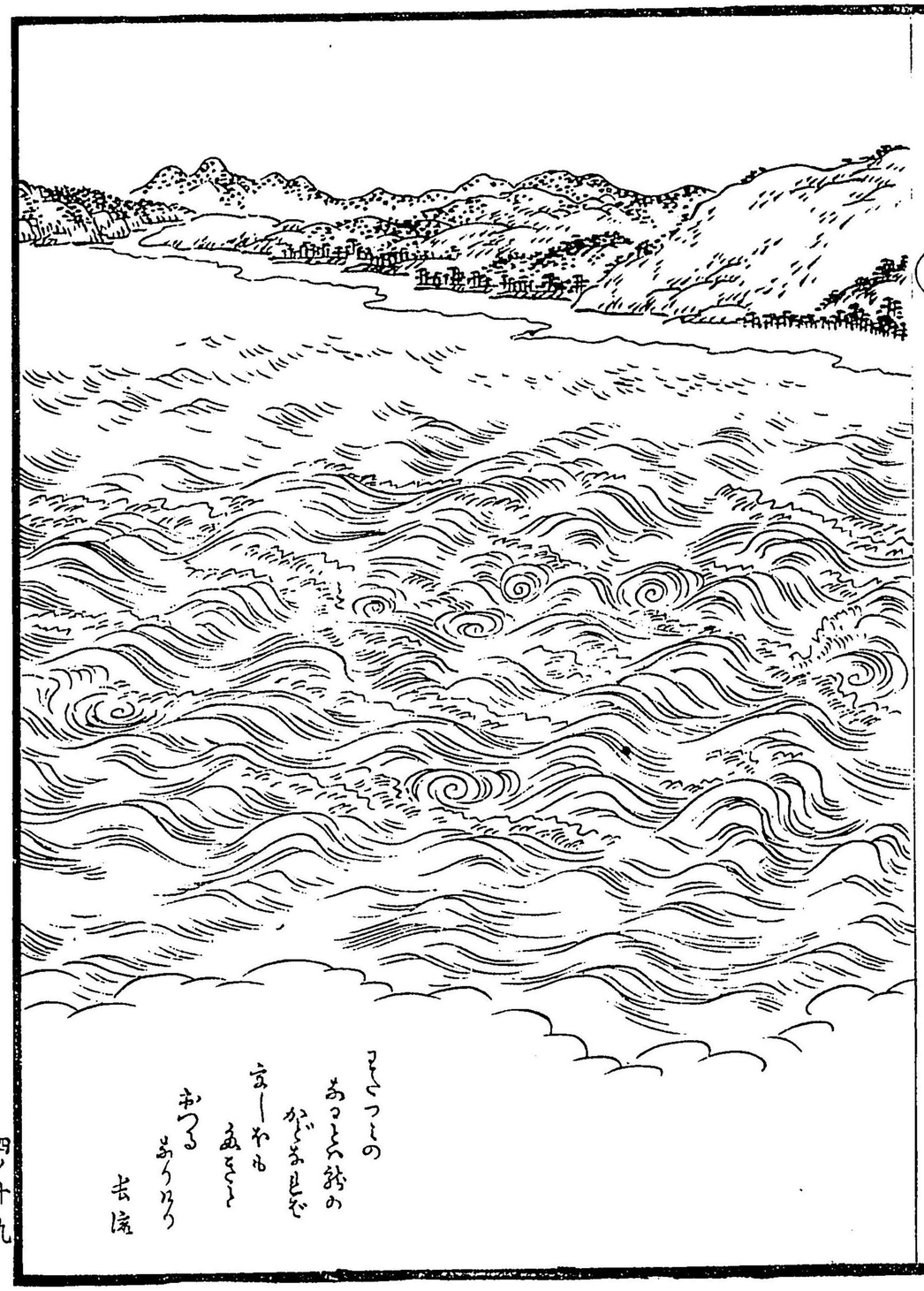

小豆島
島田岬
鳴戸崎
聞しより
そぢめて今も
おとろきぬ
波もいひたつぬ
波の鳴門も
仁良親王
柏平図

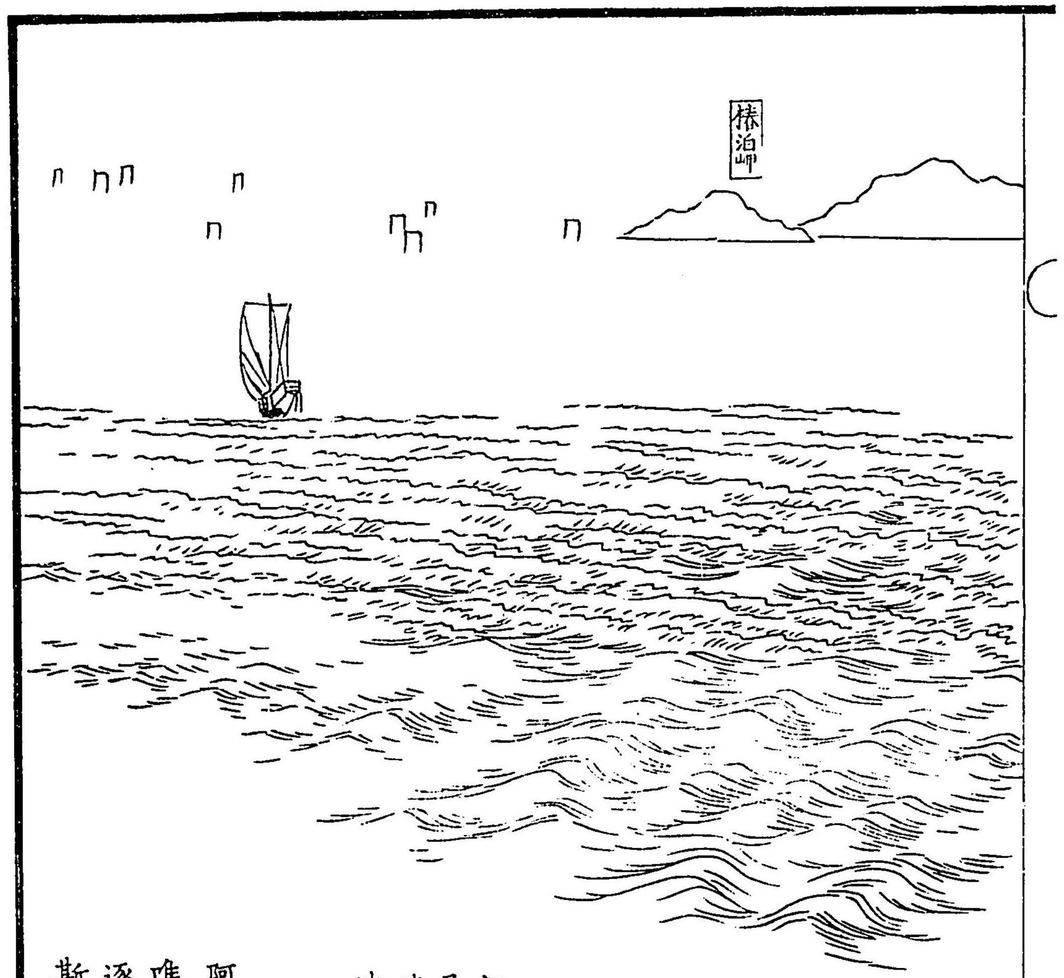

鳴門嵜


阿波
大毛山
ヨツノ磯
夷島
ミカヲ
トビ島
蝶ふたゝ
わるや
ゆつを
越せちら
門左


マゴ背
銚子ノ口
ダカ島
中瀬


女夫岩
撫養日


ちとつしの
あるとゝ鈴の
かぐさまとぞ
立しわゆ
あをゝ
おつる
あうろろ
去流

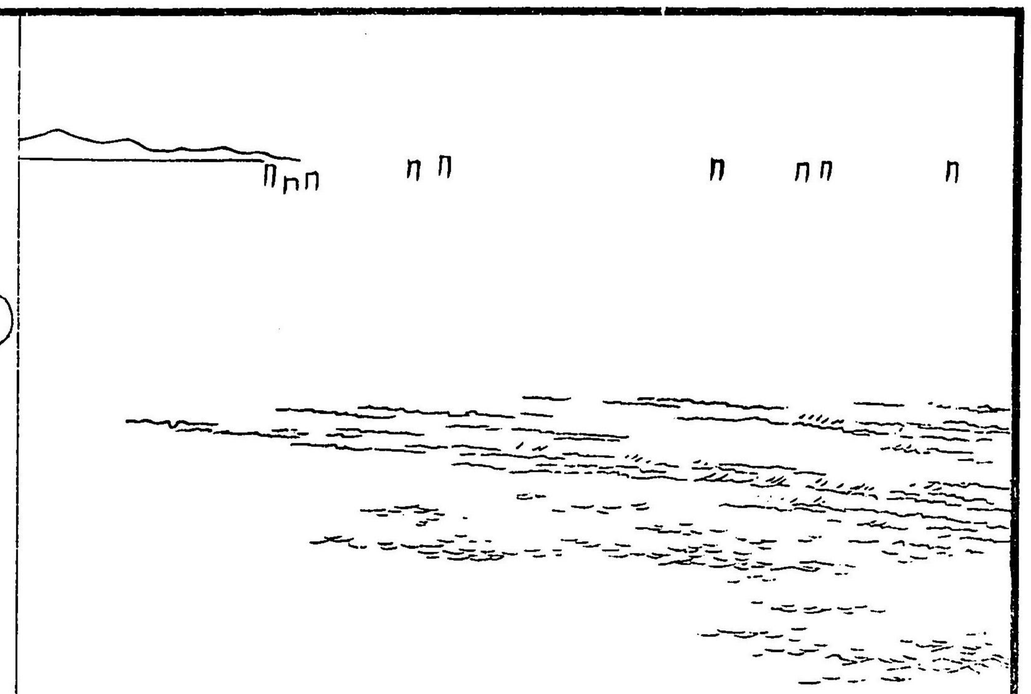


鳴門を渡るかしこみ
ちはやぶる
神代もきこえ
契沖

紀藩之人敬英字世昌
号玉洲謂曰鳴門在阿
淡之間而獨非可称阿
波之鳴門

題鳴門石壁

阿淡鳴門渡海難不
唯孤艇畏波瀾園中
逐客秦時禁幾許李
斯教膽寒



阿波の鳴門と淡路島山ホ迩し東西三里南北十町余銚子の口の様なる所西と播磨灘讃岐の海東と紀州の大海なり海底より數百丈の大岩水上ホ顕れ散多あり其岩と岩の間を船行通ずるあり不断涛ありきあり汐引汐の時大岩ホ漲て當る水の音ハ百千の雷ホ似て潮烟虚空ホ立登て又雨とふるあり汐八重の時と浪静まりて穏あり此時と小船ホて往來し漁船あゞ到るあり此鳴門を渡る時又西よりハ引潮と待東よりハさし汐を待あり是を潮待と云十分の順風ホても鳴門の潮もしぶいなとて帆柱の方へ帆ふくるあり汐早き故なり是を帆つ裏うと云淡路の福良と云湊すぐい凡二里餘熟茶二三服の間ホいたるあり汐四五歩まぐい来あり六歩とも浪荒くして乗ぐるし翌の汐時迄待つあり

さながら蝶の花とそゞ(ぐ)ぶ(ぶ)ひ〳〵鎧ヶ岸へ浪よふれ〳〵岩それ水織せり
荒浪ふたぐよ〻釣人へ二重よ重あり三重よたゝみ尤よ別を右ふ列る宜あ
哉浦人の世と紙〳〵せ〳〵海士がいとゝあ〳〵あそいと愛度き西へ真〻うゑふ〳〵
吉備小豆島よりうづ高く消る湖へ鳴門と越る〳〵紀の海よ落る真向ふ舟々
ま〳〵〳〵陸よ水天と隔つ渺路〳〵ゑ翠の黛と幻ま〻ゆけ播广浮ま白雲の
峯とつゝゑ西北のなゞめへ遥ふ目と遠ざ〳〵爰よ及んで詩歌連俳も詞と尽
そび墨客も打見ゆま〳〵毫と採るふ惑ふ〻ひゝむ

鳴門逸民　益齋竹叟七十齡誌

拆うゑす浪やあるゝの秋の声　竹叟

浪〳〵浪白きうゑよしぐれ〳〵　尺艾

阿波渭津記曰阿州渭津之為景也臨碧海倚疊嶂帶長川布平
原吾恥之嶋東聳高越之巓西連北有鳴門之急灘逆湍暴浪
風疾雷奔即海若之所匿云云

諸國奇跡考云阿波の鳴門へ塩時ふあれば山海もゞ〳〵どゝ〳〵と鳴て驚
目の間よ七尺餘あゞる西南の潮息十八町の喉よせまる駁しきる推ちゝ
べ〳〵ゆゞ〳〵の間ふ此岩の上と漲と越あり　下畧

著聞集曰筆葉師用光南海道よ發向の時海賊よあひゝり用光を既ふ
あゝるとゝ時海賊ふ向〳〵曰我久〳〵筆葉とゝ〳〵朝よ仕へ世ふ
許されゝり今いゝひあ〳〵賊徒の為よ害されんゝゝ是宿業のあ〳〵ゝゝ
暫〳〵の命得させよ一曲の雅声を吹んとゝ〳〵海賊ぬける太刀を押へて吹せ
ゝり用光最期の勤と思ひ〳〵泣〳〵臨調子吹ゝゝ其時情ゑ群賊も
感涙をたれ〳〵用光を免〳〵ゝり剰へ渺路の南流戸迫おゝりて下〳〵置ゝ
按ふ中瀬ゝり向ふ大鳴門と称〳〵阿波国よ属〳〵此方と小鳴戸と称て渺路国ふ
属ゝ此よ渺路の鳴門とゝふ則ち小鳴戸の辺阿那賀福良等ふ近き所
あゝべ〳〵

新古拾遺　渺路〳〵迫門の追風吹ゝひ〳〵やゞて鳴門ふめ〳〵ふ舟人

新古今　淡路しま阿波戸遥に見し月の近き今宵は所からかも　躬恒

夫木　塩風にあるとをりに淡路島そびひに見えて渡る舟人　民部卿 民家

淡路島とわたる舩のかぢ間にも吾は忘れど君ゆしぞらへ　山邉赤人

三千風文集鳴門眺望の記云霜月十二日の空も甞きぬいざや鳴門に耳よせてんと案内者獨を供して一里半の峰路羊腸をすぎり廿餘町の岬端之遠とたどり十丈許に峙てる岩の肩に打襄り乾搗和布打しれ鳴門の早瀬と究踵の下に見て向ひは阿州撫養の崎手届く程ありそや漸々と汐時になりぬれや山海ゆるぐともなく輷々と鳴音きこゆもろや西の海原よるく七尺餘脹高げなり山陽西海の汐息只十八町の喉に薄震ひ喘息せる音なりば震も理ぞあり此中程に二丈許の岩島なり一寸のひまなく岩頭を瀬溯うちこえて縦に底の渦ひぢれあひて千騎の雷車と一音に掴むるや肝魂も消つべくり也水烟朶山を壁ば波嵐瑤空の勢ひ刹那に龍門千尺の瀑布逆天に流も那智三百尋の飛湍銀漢におちかゝると灘谷の巴左右に淋渕穴の深さは金輪も見えぬべし追々次第して流も変り瞭合し且顕れ且きえゆく今の餘波の畦々は千尋九拱の白龍乙とおどるさきまへ金翅鳥も爰すや蝕をらん遥に涌くる波頭は鯢魚鰭と見せる適大鵬翁も粤に巵言の鈎を投ようしかくしば此隣濱の漁夫ならと小き舴艋に埊涂除の舳艫と翅りて只鵜鶘の鱗鬣を追まはるが如くいそがしく喝戻ひやられ渦穴の水谷と南風北風縦横無尋に見え隠れ行遠ふさなれ花の錦の鶯梭雲の衣の雷杼より猶迅なり信にかまへるが身まれ浪風もなかうらん渡りしらぬ世のうろれ何と鳴門のうきさの良ありし形勢ありかしこ潮の上四尺許に減るりされば右の江阿に待挨たる商船の人次般いろるが吾殿ちしじと舳碇引上艫ぬり廻し撓柄握ると見えしが焉と大事と氣をのくそや海原の嶝にゆとしかくまば弾指の中に九餘里の目路一颿にあしく鷺ろひらねる車渠の於日本一の見ものやと餘りに肝心悸き氣羸まそて

海賊妙音ヨ
感じて
用光を
助く

舍ヲ寺の仮窓ヨ机〳〵鳴門の眺望ホ當寺の艶景福良の八境ニ丈一卷
ホ法ぐヲ梵庫ホこゑ〳〵帰ヲ
鳴門〳〵ぐれ〳〵浮世の松ハ風もなし

景狂人
三千風

鳴門短歌

天風吹蹙廻瀾紫鯨呿鼇擲誰正視君家鳴門去咫尺
雙眼到處難爲水鳴水潺湲不容刀坳堂覆杯置盃膠
胸呑雲夢無芥蔕知君對此徒哂嘲嗟吾南海未果涉
空望海雲碧疊疊何時訪君傾金尊醉把盤渦當咲靨

賴襄子成

○

鳴門維昔地湧而山出焉。謂之淡路其周五十里以外横於播阿之間其北曰岩屋。南曰鳴門矣。鳴門之爲言落際也。在淡阿之間。相對爲門。萬頃之潮出入處也 予文化戊辰春三月望後一日測

量之次至此地。得觀其勝。夫高山絶而爲門者所謂鳴門也。其東崖淡路户崎。西阿波姥崎也。相隔財可十八町。西崖悉奇石峻然。其間有晴嶕〻之西曰大鳴門。東曰小鳴門。又西南奇石獨立而蒙草木者飛苫也。此日潮最大之極也。故其盛則萬頃之潮。至大小鳴門奔流隱〻如雷聲。直當飛苫而西南矣。蓋天下至險之地也。世人稱之鳴門。鳴呼有故哉

伊能敬慎撰

太平記曰康安元年七月阿波の鳴户俄ホ潮去〻陸となる高く峙こる岩の上ヨ筒のまゝり二十尋許ある大皷の銀の泡頭丁と打て面ホ巴とかゝ臺ヨハ八龍と拏うせこるが顕ハヲ出こり暫ハ見人懼〻近づぐ三四日と經〻後近き傍ヨ浦人ど数百人ぢつまり〻見ホ筒ハ石ホ〻面ハ水牛の皮ホ〻ぞ張〻る尋常の撥〻打ハ鳴じ〻ぞ大ある鐘木と拵〻大鐘と撞〻る此大皷天ヨひゞき地と動か〻〻三時ぢりぞ鳴こり山崩ぢ〻谷ホ答へ潮涌て天ヨ漲りこれハ

数百人の浦人ども只今大地の底へ引入らるゝ心地して肝魂も身ゆ副ひ倒るゝもあり走るゝもあり四角八方へ逃散る其後より彌近付人も無りられば天より上りゆ又海中へや入ゆ潮ハ元のごとく満て大鼓ハ見ひ成ふくり 云云

天正軍記曰天正十三年四國征伐の條ゆ羽柴美濃守秀長と大将として八万余騎と相揃へ海ゆ船渡しもるもの一所よりひ和州紀州泉州の人数ハ直ゆ淡路の洲本ゆ丹州の人数ハ羽柴孫七郎秀次と引率して播州より淡路の岩屋ゆ着岸ひ 云云 大将秀長ハ淡路の福良ゆ船と揃へ鳴門と渡さんとひ彼迫門ハ三國一の大灘一日一夜潮のさひき汐相邀ふ時ハ前ゆ大山ひ越れ後ゆ遠去ひ人の詞ゆいふ此門と越る魚脊骨ゆハ節と生ゆ一度越る時ハ一節と生ゆ二度ゆ越る時ハ二節ひり其勞辛ひるべき時ハ船十ゆ一ものゝごとく七花八烈と殊ゆ妖頃大雨の日ゆ渡る其夜ハ風とある然りとゝいへども日限を定める間大船六百般小船三百艘舟奉行と定めゝ浦々の船頭力者艪櫂舵と立あゝ諸勢一同ゆ潮時と相えり鳴門と押出ひ福良より土佐どまり迫ハ五里廻ゝゝ濤艇をたゝ或ハ渦ゆ巻込られ或ハ潮風ゆりみ立られけいゆを欺く武士といへども阜卧て艪軸と枕ゆゝゝ船の底ゆふれ伏ひあひに奇怪の事ひり海中ゆ一の嶋ありゝ動揺ひ其高さ十七八町ゆどに近付てひり是と見まゆ大魚ひり鯨鯢ゆあゝ山ゆほし皆人舌とまれ身毛ゆちゝ或ハ膽と消ゝ魂と失ふ其時大鳥銃と揃へゆまとひる

阿那賀浦 阿那賀村ニひり福良浦より渡海ひ波ゆひり舟着より一説ゆ細長ゆゝ西ゆあれり福良の浦より阿波ゆ渡るふ風ひり時ハ此所より舟着より

當浦ハ志知川山の南ゆ有ゝ南北長く出岬ゆゝ北ハ圓山中央ハ鎧崎南ハ鳴門寄あり海上一里半許りて阿列撫艱の山見えり船着ハ鎧崎の南ゆひり人家ゆゝ立列ゆり。阿那賀溪 同村の山中より出て海ゆ入

宮の端 同浦湊口の南の出崎とゝ春日の神社ひりと以て号く

春日神社 同舟着の傍ゆひり紙園社牟德神祠住吉社等本社の傍ゆあり社僧春日寺例祭九月九日神輿渡御ひり

半島

古碑　鳥居の前に有り大永七年の銘見へたり古城主武田の一族の墓なるか乎と云
又天正七年の古碑其余武田家の長臣の墓なり

春日寺　右神社の守護職なり松林山圓壽院と号し本尊大日如来長二尺許真言宗日輪上人開基と云医王堂本尊
薬師佛長五寸許春日佛師の作と云

什寶湿槃像古畫一軸　たたり　鮮明なり唐画と云

伊比島　同東南つづく地の島と云ふ鳴門に近し離れ南にあり此辺りの総名ようび高サ五間ばかり周廻四町許の
島山なり〳〵へ陸とまれて海中にあり〳〵なべ

澳の島　右地の島の西一町半許海中にあり高サ四間許　鯨嵜　地島の西北につゝく
周三町ばかり陸地より眺望よし

鎧崎　同湊ぐちの西の出嵜壁岸の累石恰も甲の草摺のごし故に名づくと云

草香圓山　同村にあり志知川村の山境〳〵西に出張る白須に續きる一島と長さ凡八十間ばかり
幅四十間ばかり高サ九間ばかり頂上にあり〳〵る田圃あり諸船の泊りなり

辨天島　同南にあり弁天祠あるとなり号く通俗沖の〳〵と云海を隔つ〳〵九十間許干潮に
歩渉れば高さ九六間許

礁　同北の海中にあり平常あり　屏風岩　圓山の〳〵にあり懸崖の
高サ十間ばかり

古城跡　同浦春日寺の南の山上にあり山の高サ九十三間ばかり西に宮の鼻とつづけて山上は平地なり
古井あり〳〵廓中の形尚存せり

傳云武田氏数世ありて居住し里人阿那賀殿と称し武田山城守久忠其子
彦五郎其子彈正と云ふ此三代の間所々に兵を出し引田の陣にも至りしが
天正年中彈正へ由良の城に於て討死し終に家廢れ其時當阿那賀

の城も没落せと云ふ

奥御堂古趾　同浦の東にあり傍に今石佛を存れ　勝其和尚座禪古趾　同浦磯辺の懸崖に有り国清菴二代の
名僧なり傳へ奥に出れ

志知川山西路山　草香の濱の後にあり傳云武田家の時代采地志知川村西路村の里民にて此山の薪を採ること許せり

猪狩溪　伊加利村の衆水津井村に流れて海に入

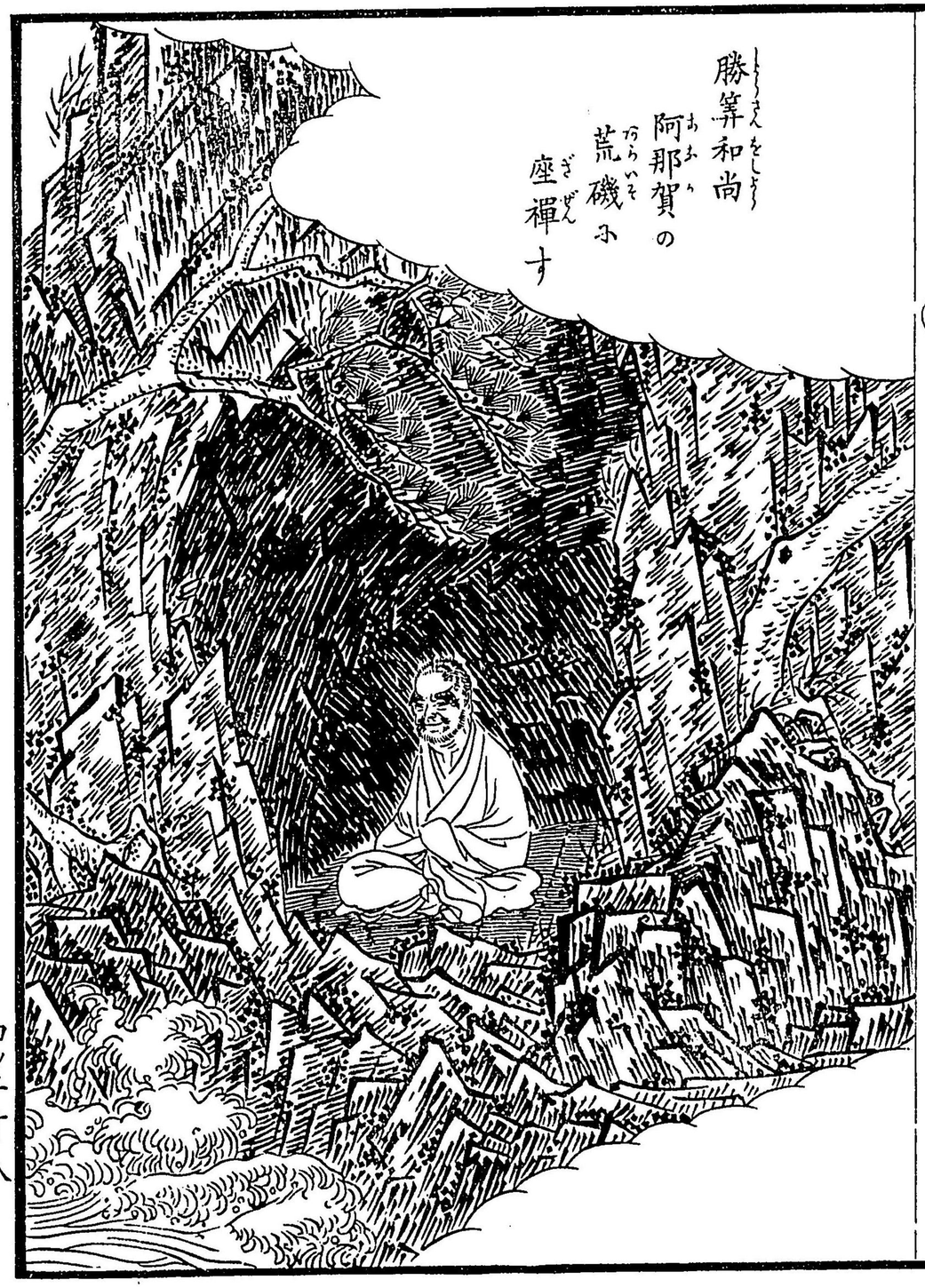
猪狩八幡宮　伊加利村にあり例祭正月十五日的矢神事　八月十五日相撲會　十月初卯日等
神事あり　社僧妙雲寺社司まこれを守護れ

當社再奥の上梁の牌に永正九年壬申四月　伊賀黎庄八幡宮再奥と
記せり又大般若經六百軸あり奥書に至徳二年十月廿五日以葛原八幡
宮御本一校了とあり今神庫に藏む　至徳は百一代後小松帝の年号なり　足利将軍義満公の治世に

一説に往古應神仁德履中反正等の諸皇淀路に行幸ありて御狩しなりと
國史に見へたり多くは此山中に入て御遊ありしなり故に猪狩の名なり

山王權現祠　同村山王山の下九山にあり社僧妙雲寺　例祭十一月申の日

妙雲寺　同村にあり松嶺山と号し本尊大日如来境内に薬師堂あり舊医王山と称し廢寺の遺号なり
寺内の墓場は慶長中の古石碑あり


勝算和尚
阿那賀の
荒磯ふ
座禪す

若磯や
ふる迫ゆる
波のうけ
素雲
大浪ふ
まくらもと
ひろふる
うを
常仙
公左

村中ニ廢寺の趾多〳〵道化寺趾 地藏の小堂 等成寺趾 柚の河ニ 西臺寺趾 里人西伸堂と称ス阿弥陀の小堂

大門の池平等寺趾佛の原皆皆廢跡ありとぞ

古城墟 同村の東ニあり城の山と云ふ田圃の字と堀といふ城山懸崖大石あり〳〵地名を石津女と云ふ林叢の中ニ遊祖神と祭る城主詳ならず此辺りニ橋本氏の中き地と言傳ふる所あり〳〵其中ニ金井と云ふる古井あり〳〵や是ニ城主の遺名あるべし乎

一説ニ橋本隼人佐居城ス天文中ニ没ス其子主水正永想ハ三河国ニ退去ス云〳〵

雩丘 同村の西竹生山の頂上ニあり津井阿郡賀伊加利ホの最大の高嶺 旱天の年里民雨を祈るに必ず奇瑞あり云〳〵

烏帽子峯 竜ヶ〳〵山ニつゞく嶺あり其形似るを以て名づく 讃岐岩 同山中ニあり讃岐の地眼下ニ見る讃岐見の岩と云ふと畧せり〳〵云

新羅谷 同山口ニあり大唐ヶ原の山中ニ〳〵蕃人と云ふ〳〵福良浦の西の濱辺ニも新羅と云ふる所あり其いまれ此地ニ同じ

大人足趾池 同村ニ二ヶ所一ハ大唐ヶ原ニありて田とする一ハ村の西ニあり〳〵池あり畢竟かゝるものの似るを以て名づけるなるべし

揺石 新羅ヶ谷の岩の坤一町ばかり下ニあり黒き色の大石二ツ累り上の石の高さ七尺下の石の大さ二間四方ばかり此上の石を推せば動く故ニ名ふるか

仲野安雄翁 同村の支邑仲野の里正ニ通称廣助或脩竹盧と号し生得強記にして和漢ホ博識なり著述の書籍世ニ多し〳〵安永七年没享年八十三

亀石 仲野村草谷の口ニあり形似るを以て号く甲の上の廣さ十尺ばかり許高さ凡七尺余り

雁子崎 津井村の海辺の岬ニて播磨路ニ對ひ眺望いとゝ絶景あり

龍棲山 同村の西ニあり古へ竜ヶ〳〵山中ニ棲りと云ふ南の山の絶頂ニ薬師岩と云ふあり又寂黙谷と云ふ所隱者の菴居せし所ニて寂黙谷と云ふ所の趾ありん乎と云ふ

湊浦 津井村の東ニある三原郡中の水皆あの海ニ飯ス當郡の湊口ホ〳〵海船ハ〳〵来る所あり故ニ人家三百余戸商家職家建つゞく繁花あり 湊浦の西の脇より北の出鼻ニあり高さ凡一丈許の大石ホ〳〵翁と媼の對ひ合ふる形なり

翁媼石 此地を俗ニ翁媼ヶ崎と云ふ

岩の間ホ小祠を構へ〳〵登立の明神と号ス故ニ世人登立の翁媼と云ふ其名高〳〵三月三日祭祀御湯神樂を奏ス

感應寺渡 同浦より古津路村感應寺の下ホ往来の舟渡〳〵ある故斯ハ名づく里俗是を可堂の渡〳〵と云

渡口の川幅凡廿間餘平生ホ渡船一艘を置く岸ホ綱とつけ渡る者手づゝ是を曳〳〵渡る國中の一奇といふべし 古津路感應堂の所ニ図を出せば〳〵れ畧ス

湊口神社 湊里村ニあり延喜式ホ出祭神蛭児尊と云或云速秋津日子速秋津日賣の二神ニも云 例祭正月十六日八月十六日神事相撲あり

延喜式曰 淡路國三原郡湊口神社

三代實録 清和天皇貞觀元年十二月十四日乙未授淡路國正六位上湊口神從五位下

同 光孝天皇元慶八年九月廿一日戊寅授淡路國從五位下湊口神從五位上

長寛勘文曰天慶三年二月一日丁酉有諸社位記請印事
去承平五年依海賊事被祈申十二社位記也正四位下
湊口神
常盤草按云朱雀院承平四年より山陽南海ゟ海賊起て官兵ゟれと
征伐ゟ同六年海賊の大將藤原純友伊豫國ゟ起り〳〵阿波渋路あゞと
掠め阿波ゟ藤原國風も敗軍〳〵渋路ゟ來り〳〵湊口神ゟ
祈られ〳〵此間の事あゝべし
八幡宮 同村ニゟり本殿應神天皇と祭る仲哀帝の社ハ本社の左ニゟり仁德帝の社ハ右の傍ニあり
荒神の祠宝庫等ハ拜殿の左右ニゟり隨身門石鳥居等正面ニゟり
智積寺 八幡の社地の北ニ並ス八幡宮の別當あり龍宝山蓮花王院と号し本尊大日如来護广堂ハ
本堂の南ニゟり不動明王と安ゞ并三十三体の観音と安ゞ藥師堂門外の東傍ニあり
鐘堂ハ八幡宮鳥居の東傍ニゟり〳〵
大地〳〵坊中ゟ〳〵有〳〵と云
古城蹟 同八幡宮社地の坤三町許ニゟり世ニ安宅冶郎の居城と云上段中段あり て矢倉堂
天守堂あゞ称し安宅冶郎其傳詳あゞ
里老云安宅冶郎殿射道ゟ達〳〵此澳と往通ふ船と目ゞけ〳〵矢と射るふ
一度もとゞ〳〵なし〳〵とゞ按ニ由良沔本三野畑炬口千草岩屋安呼あゞ

皆安宅氏の居館ゟり若くハ當城の安宅も一族あゝんゝとゝふ
右城跡の西の方田圃の中ゟ安宅殿の古墳〳〵ゟ傳ふる五輪の塔あり法号磨滅
〳〵大永六丙戌年五月廿五日の文字幽ニ見えゝり今小祠とゝあゝて古墳
の上ゟ覆ひ安宅明神と称〳〵崇敬ゞ
宇佐八幡宮 西路浦村ニゟり豊前国宇佐の太神と勅請ゞ故ニ号く若宮ハ本殿の南ゟゟり稲荷祠
例祭正月十五日 八月十五日 十一月六日と用也別當 ゟれゟ並ゞ伊弉諾の石祠本殿の北ニあり其余即供殿鐘堂隨身門石の鳥居等あり
藥泉寺北の川辺ニあり本尊阿弥陀佛と安ゞ
國清菴 同村山田池の西雑子ゞ谷の下ニゟり禪宗黄檗派ニ
尼田北村国清寺の廢基と稱〳〵南〳〵
本尊 釋迦牟尼佛 并達磨大師 三十三躰觀世音と安ゞ
勝莫和尚之像 本尊の左傍厨子ニ安ゞ 長凡二尺許
右厨子の前の左右ニ靈牌ゟり
表ニ云 當山開基第二代臨濟正宗三十五世勝莫老和尚 覺位
裏ニ 元文四巳未年三月十七日
仝 當山三世臨濟正傳三十六世上仙下籟霊大和尚 覺位
仝 寛保三癸亥四月廿一日

當寺開山ハ攝州西成郡難波村慈雲山瑞龍寺二代實洲和尚なり其嗣世勝算和尚ハ瑞龍寺前住鐵眼禪師の弟子ゆゑ貞享元年より此庵室ニ住ス

一説ニ勝算ハ原此浦の産ニて幼き時より浪華ニ出て太刀屋某の家ニ撫育せられ鐵眼和尚の弟子となる此僧法華を誦スるゆ數千卷幼より多病なるゆ良劑を自製して九散の霊法と調煉し既ニ身堅固なり道德衆ニ勝れ聽見の多事と失却せるゆなり或ハ海濵ニ遊歩し荒磯の岸ニ座禪し（今尚あるの海辺ニ幽谷ニ入て出ざるゆ三四日又ハ小舟ニ盥のごとき座禪の古趾あり）近来まで寺ニ存せしが朽ちぬ棹さし獨遊し鳴門を渡る又洋澳ニ到れば櫓械を棄て漂ひ自ら其舟の志ス所ニ行せ又畜ニ持物を藏有ニ往來せ人の家ニ入て魚肉を施せば受て之れを食ス世俗称して畜和尚と称ぶ臨終の時自ら沐浴し法衣を改め佛前ニ座禪し頭北面西ニて入寂せ年七十七遺言ニよりて火葬ス全體ゑ舎利ニ化ス

勝算和尚肖像

むつのちまた
ことことさめぬ
旅のそら
ゆくさくふ
ゆくやもゝる

ゆくやらぬ月みちさゝで
雲の門ふかきをゆくとの
ゆくゝ此 叡

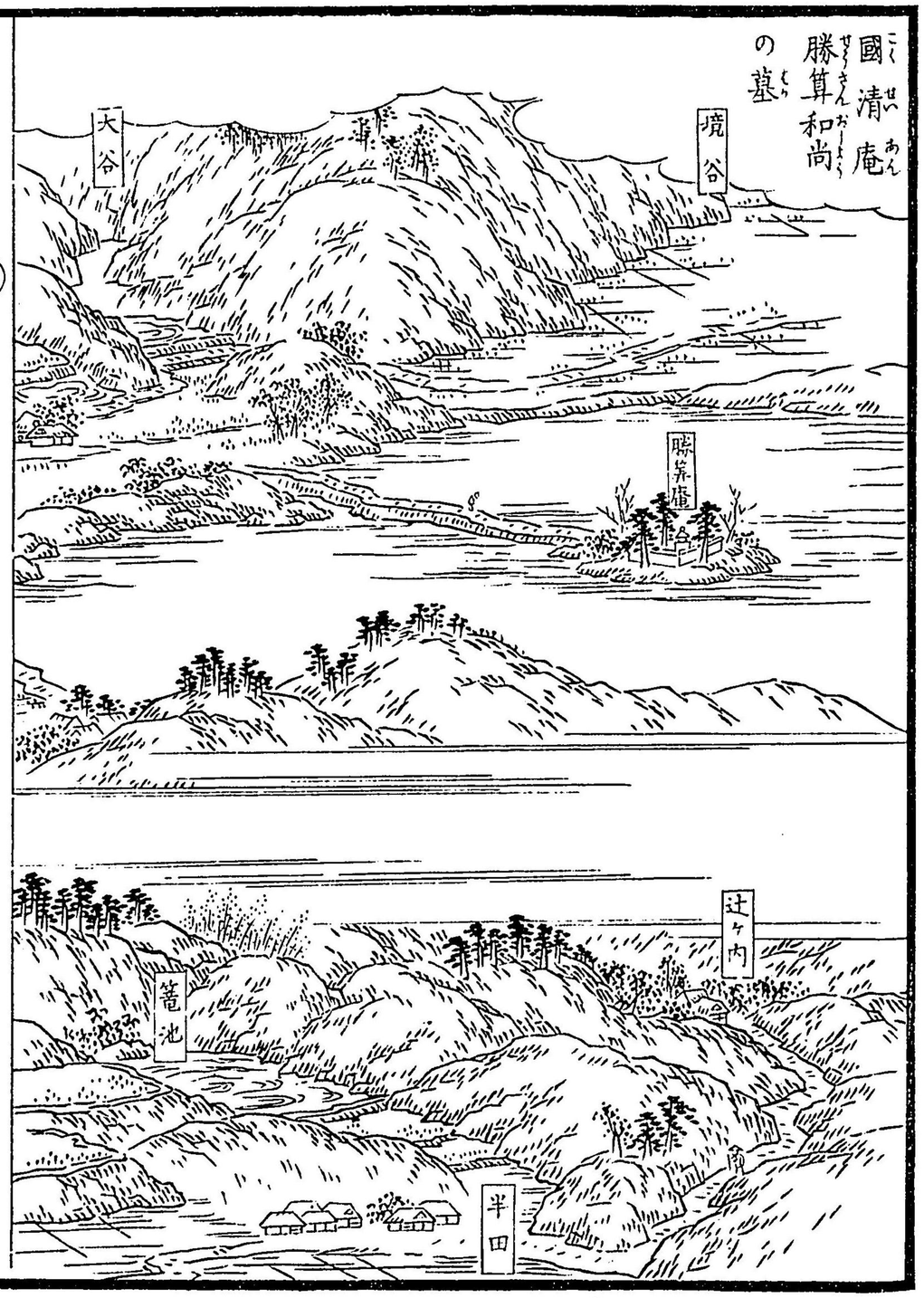
黙仲勝算

又奇なり則其舍利今猶堂内に尊祭し又和尚調煉の薬法今猶當
菴より施薬をと聞き
或云勝算和尚幼稚ゆゑ〳〵其父貧〳〵算を育くむこと能〳〵浪華ゆ
遣〳〵賤家に僕仕せしむ一日其主翁先祖の忌辰に當ると以て供粮せん
〳〵算を〳〵豆腐を買しむ算往道ゆ〳〵童の雀児を弄ぶを算これを
見るに忍びざる乃ち銭を与へ〳〵あるを求め放ち助け〳〵豆腐を求めかへして
家に皈る主人怒つて之を責算依然〳〵答へ曰佛の日ゆ〳〵豆腐を
供養しまつると苦禽を放ちやりと何れか佛意に愜るや主人大ゆ感じ是
凡の童ゆあらざる〳〵即ち難波瑞竜寺の鐵眼禪師ゆ托〳〵佛子と為
しむ熟禪の後瑞竜寺に住し老て故郷ゆかへり国清菴ゆ住せり云云

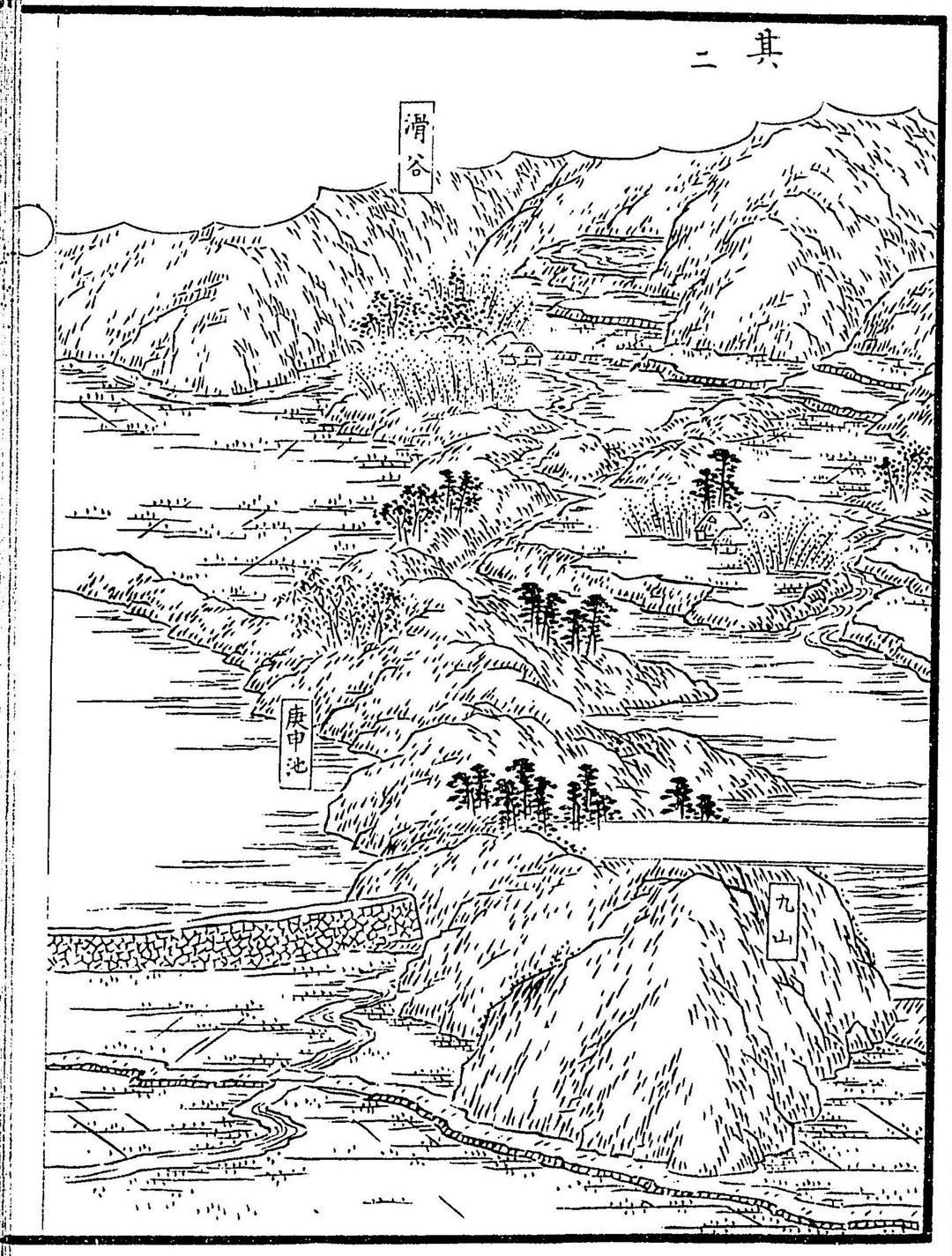
鳴門ゆ〳〵の詠

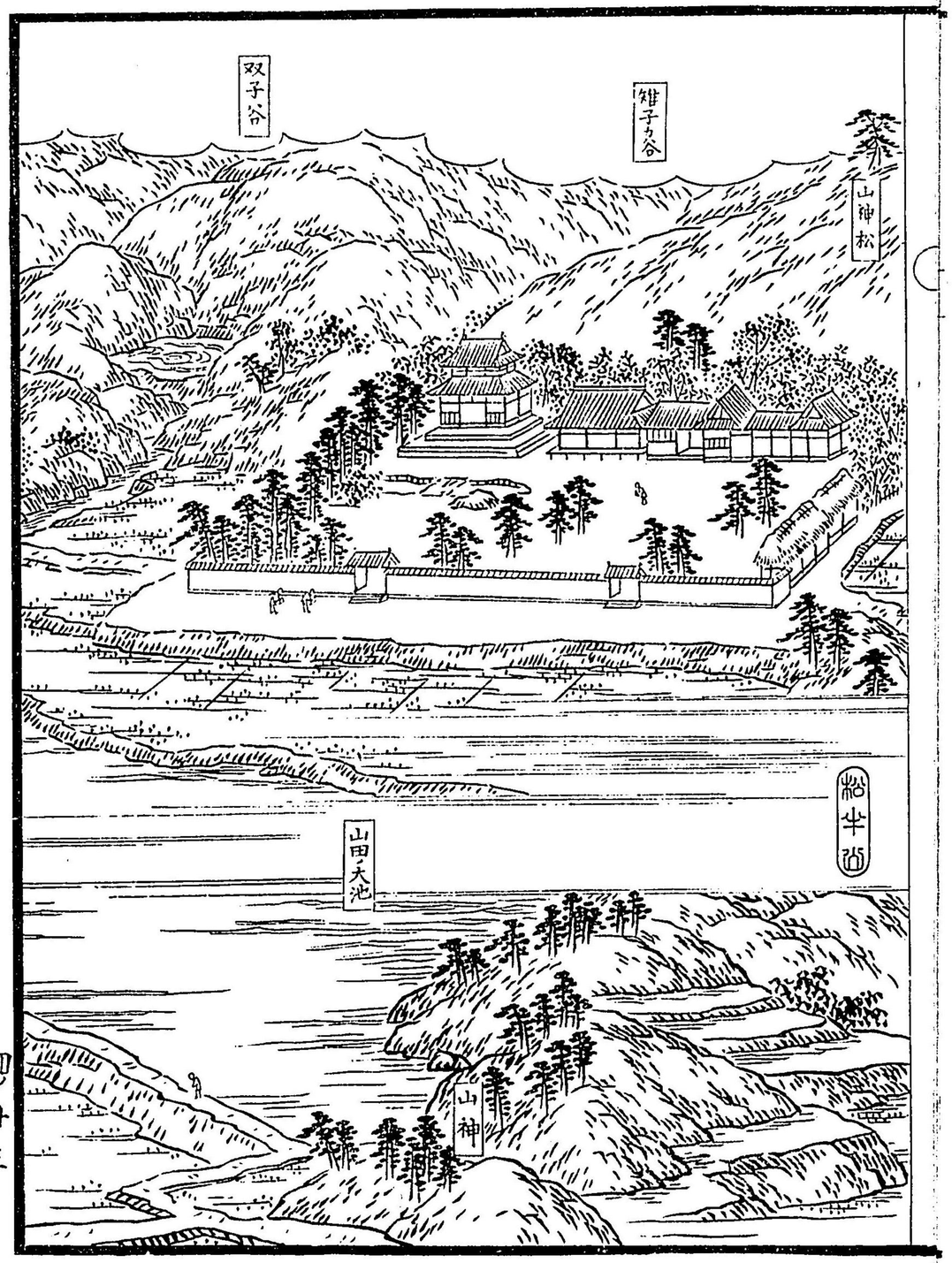
世の中を思ひたゆとて渡る身い阿波の鳴門も長閑ゆ見る

病中の詠二首



其二





上もあれ佛の道をあとめて命も身をもゆしむ物うは
骨と粉ふ身と碎きても法の道りとめて止む我ろろうが

遺偈

本來面目　具足圓成　七十七歳　幻死幻生

勝箕臨末自書

未三月十七日

什寶勝箕和尚所持遺物

馬腦石正觀音　兵善財童子　水瓶ホウ　長凡一寸五分唐作厨子ニ安ル

水晶數珠一連　二十五條袈裟　柳染衣　拂子一柄　沓一足

法華經八卷　平生ニ讀誦セルト所ト云

笠一蓋　渋張色黒ニ手製　奮一　常ニ法華經ヲ入如意カケテ肩ニカケ遊歴セラレシト云故ニ俗ニ奮和尚ト称ス

定惠島　境谷池の小島ニ国清菴より丑の方ニ町許ニあり

勝箕和尚石碑　右定惠島ニあり周ニ壁ニ築き内ニ石塔あり銘ニ云

師諱元妙号曰勝箕姓太刀氏生于本縣幼而祝髮應
化無方入凡入聖不管否臧開創兒岳移住蘗峯寓洛
峩阜董摂瑞龍四衆傾膽十方欽風度生念薄養老島
中天資扑素誦妙法華萬三千部常厭世譁書幻生句
忽入那伽爲不信者留舍利羅爰承遺托取收化灰以
爲塔様團團玉推巍巍輪角千古垂彝香賓花容共證
無爲國清嗣法小師　浄霊　合掌稽首謹記大略

于時元文五庚申歳三月十七日　小祥忌晨

國清寺舊地　片田北村ニあり　いまハ此地ニあるハ廢寺とるるハ
分の地ニうつて再興ハ云　當寺ハ明山長壽院の旧趾と稱ス
鑪河　奥河内より出て口河内を経て飯山寺佐礼尾の間ようわくら村松本村の間を流れ志知の北村ニ
至り松本河の下流ニ入る
聲明寺　たから村ニあり明山と号ス真言宗　回名松林坊と号ス
又聖観音の古像を安ス湿槃像の古畫又五大尊金胎両部の曼陀羅等あり裏書ニ曰天文十七年
新ニ図画　西神代の三社ニ寄附ス開眼導師ハ国分鏡智院主
施主中島村藤の坊と云又古物の鏡鉢あり朝鮮の製ニ似タリト云
家山　片田北村の後の山を又飯山寺村ニ連る山の嶺を吳山と又野口孫五郎長宗當山の佛院を明山ニ移セリ其佛院の廢址ハ今吳山ハ云
飯山　飯山寺村熊野の社の後ニあり山の形圓ニして飯を盛るが如ク四ツ名づくと云
讃州ニ所謂飯の山と云ふ同ト

寶光寺　右同村にあり　真言宗

實弘上人墓　右同村に居る実弘上人ハ原高野の僧なり仁治四年當国に配流せられ成相寺を建立ハ

鶴遊山常樂寺　中島村に居る真言宗大覚寺末流舊名條の場といふ

大屋　中島村にあり大屋氏の居たる古跡とて林叢の中に古墳あり石佛石碑石雛石燈篭などの分裂しるの見わ正しく大屋氏の墓所あるべし然れども今俗に廃帝の陵ありと傍に小祠を營み石燈篭を建廃帝天皇御廟前あと鶴に其上大屋ハ王屋なりと言傳ふること附會の説なるべし廃帝の陵のてん尚別に記せらるに畧ハ

常磐草曰大屋家記曰先祖田打始荘司神代ふ穀種を蒔廣めしより世々ふ耕作の道ひらけ農業行はる故ふ是と天下耕作の祖とハ其孫商西神代庄を領し淡路の御百姓とりふ是なり廢帝遷幸ひらく十一箇所村ふ住せの人時第三の皇子松丸君を養ひ大屋の家を継しむ恵林院公方入國しのち大屋の宅ふ往し其子義正大屋の家を継り義正ハ先庄司の外孫なり義正の子義信の時本領を没収せらる信長公の時なり義信の子を義久と号ハと云又大屋を相生國とも書りなど言傳ふ天平元年綸旨一通景雲二年綸旨一通建久三年頼朝卿よりの

下文一通ありて

高天原　中島村にあり松樹茂り群立る所とて事実詳なるべ後人神代の名を神代と云神代の古跡あるとハ似會の説と言なるべし當中島村より西を西神代と称ハ

難波溪　黒道より喜来地頭方新村より難波にあり松本より稲ヶ峯を経て小榎並の西を過志知の北村にあり松本ふのト流に入

鶴來山神應寺　同村にあり真言宗ハ當寺阿弥陀の佛頂あり吳山の本尊とて又毘沙門天観世音ホの古像とて堂内に安ハ

明山長壽院古趾　同村の後の山明山にあり志知の城主野口孫五郎長宗天正中吳山の佛院と明山の絶頂に移し寺と立僧肖恰てん住持そと云今廃して礎石のみ

松本河　福井河国衛河西山河の下流中島より難波佐礼尾の間水無瀬と名て鹽松本の間より志知北村の組橋と名て志知河山王橋の下より西路を経て江尻に至り八太河掃守河ホの下流と合流して古津路可堂のまくち口より淡河に流る海に入る

伊勢明神　松本村にあり伊勢の宮なる云内宮勸請ハ荒神祠本社の傍ふあり

當社檀の棟札に曰天正四年丙子十一月十日大檀那野口孫五郎長宗例祭正月十日八月十九日駈馬相撲會奥行十二月九日社僧聲明寺

大願主結縁有　長二尺五寸許　巾三寸五分許　又慶長八年元和元年等の棟札ひら

傳云文禄年間朝鮮の役ふ加藤左馬助嘉明出軍渡海の首途ふ當社ふ詣しく戰場ふ功ありん事と祈るの勲功有ふ於ハ食禄三分の一を献じ報ぜんと誓ひし時社檀より小蛇現出しとぞ

宝暦五年の頃社前に祭礼の相撲會ありし時群衆の中に嬰児を携へたる者あり誤て拝殿に居尿をなせり時は夜なりけるに拝殿の柱火ありて燃付たり皆々驚き水をかけて漸に火を鎮む相撲もとかくする内に終り其昼時分此柱を見るに焦たる跡なし常の如し是正しく居尿の穢を清めしめんため仮に火と見せて拝殿を清めさせ給ひける哉と諸人奇異の思ひをなしけりと云云

河童松 同本社の前にある大樹の古松なり

伝説に野口氏当所に在城の時いづもの川辺にや農馬を繋ぎありし時河童一個の法師と変じて馬を牽て水底に入んとして手綱をたぐりのち既に肛門に手を入て膽を掴み出さんとせし馬は驚き駈出し河童は手に長き綱を纏ひもちつゝとする隙なく馬の勢ひ甚しければ為方なくして引ずられながら伊勢宮の境内にいたる尤城廓に近き所なれば往来の士商早く河童を捕へ縛りて罪を責既に殺し捨んとせし河童は手を合せて屡

なげきの体なりければ死を免して以来此郷の人民牛馬などに害をなすべからずと固く約して河童をゆるしたる則ち其儀定を此松の本にてせし故に斯は名づけたりとぞ夫よりして此難に逢ふ者なしといふ

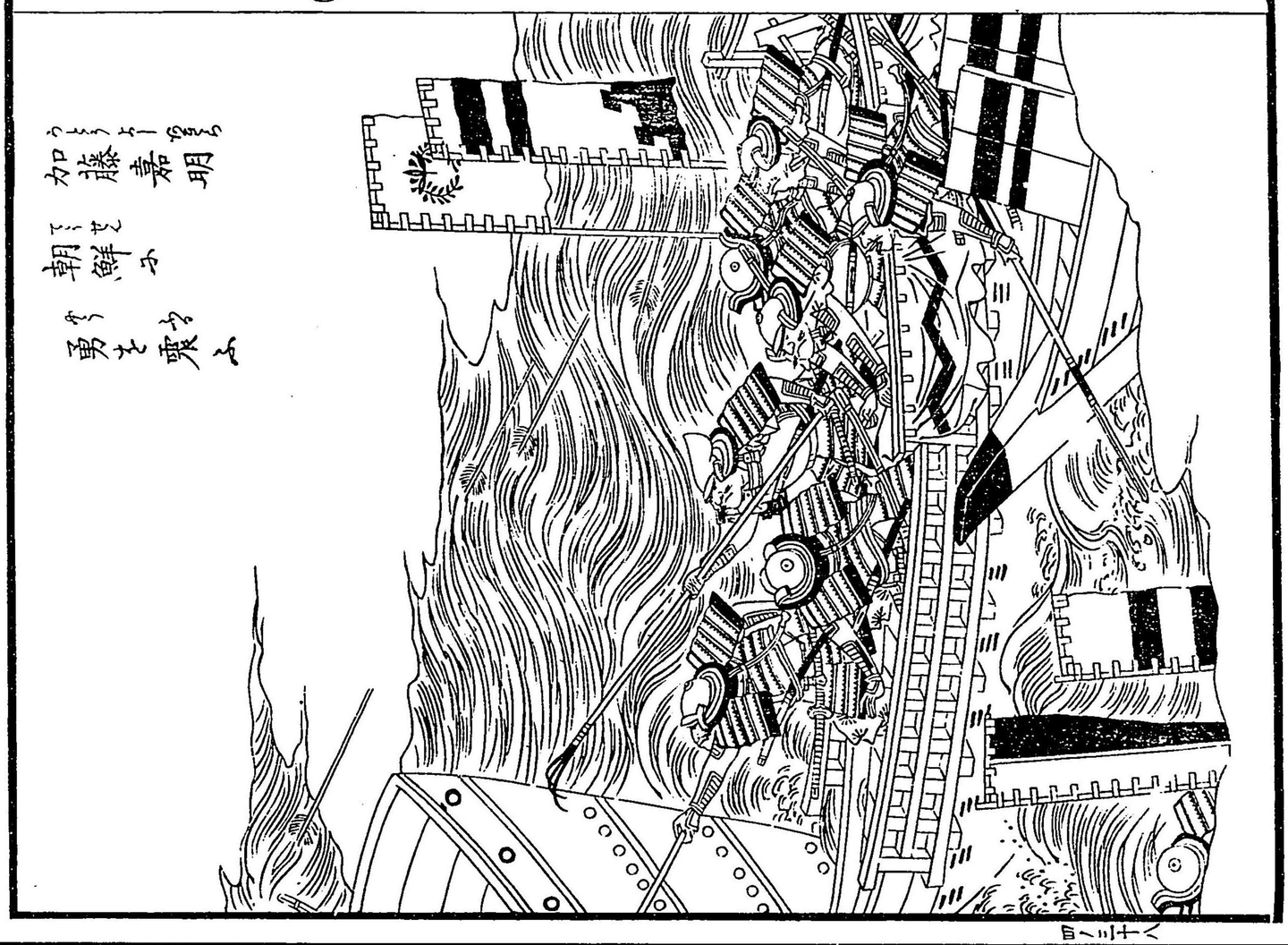
志知城堀 同村の乾にあり本丸の高サ三間方四十間周壕幅三間許外堀尚存せり 太平記に志宇知とあるも此に同じ

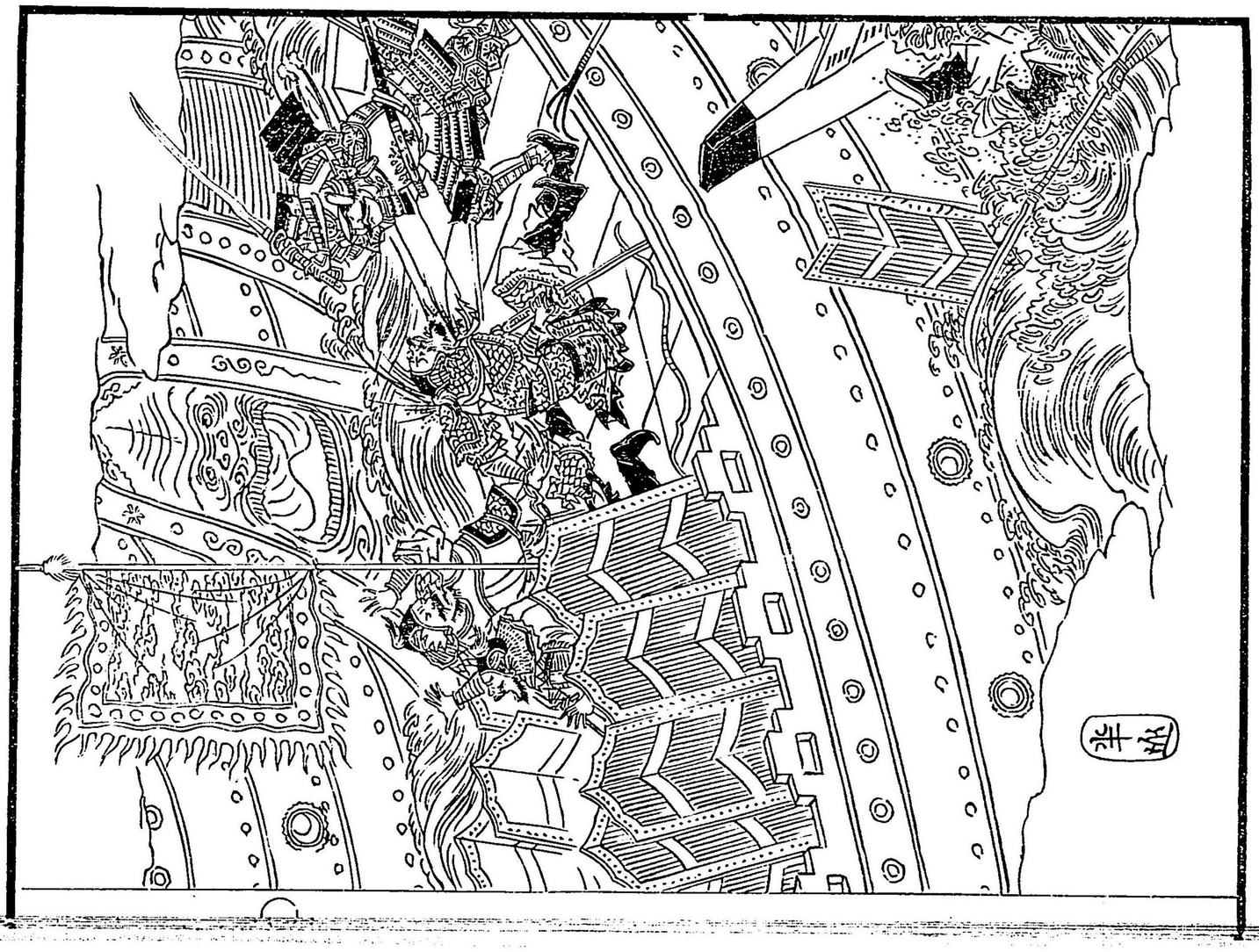
城廓大略表門辰ノ方向裏門丑に向市店跡長百四十間幅廿間堀あり其南方に市場寺内の名あり其巽の方に丹後田豊後田又北の方に築地の内丹後屋敷八重垣などいへる畝号あり天守臺十間に五間本丸の高サ三間方四十間内堀の幅八幅南の方に表門の趾丑の方に裏門の趾土橋の趾牢の趾外壕の趾等今尚存せり伊勢宮は城内より馬場ありて鎮守たり 馬場の長サ七十間巾二間 味地草に委く出

按に延元元年楠正成戦死し新田義貞敗軍の後後醍醐天皇再び叡山に遷幸ありし義貞京都を攻るの時淡路国阿万志知の人々山門に至り阿弥陀ヶ峯に陣を取細川卿律師と戦ふ同三年吉野先帝崩御しける時吉野執行吉水法印宗信曰世の危きを見て命を軽んぜん

官軍に淀路國に阿萬志知の徒義心鉄石の如く一度も変ぜぬ者ども
なりと賞せり又暦應三年服屋義助南朝の勅を奉ず伊豫に下向の
時も阿萬志知の一族武島より船を汰へ備前の児島へ送りぞ（太平記に委く見也）
其頃細川師氏下向して淀路國の官軍を征討し守護職となりしより
志知も細川に服従せしに則細川師氏の前に云養宜の舘に居住
し淀路守に任じ（此時も野氏）今後細川の代衰弱に及び三好氏の権を執る
より野口氏も三好の族となりしも也
天正十三年志知城を加藤左馬助嘉明に賜ふ（嘉明の始孫六と云天正十一年秀吉越前の柴田勝家を征する時江北折敷小群を抜んで敵に接する者七人あり是を折敷の七本鎗と云加藤孫六嘉明其一なり秀吉これを賞し一万五千石を加増せしと云）
文禄元年秀吉朝鮮征伐の諸軍渡海を此時加藤嘉明は其兵七百
五十人を率ひて志知の城の南なる蜷が瀬に軍艦を造り行装既に成て
發向せんとせり
文禄二年六月諸軍朝鮮に渡海し敵軍唐島といふる地に戰艇數百艘を調へ

日本の兵を拒んと此時加藤嘉明諸軍に魁して小船三艘にて敵船に近づき
大小舟軍して一大船に飛入り戰ひて敵兵数多斬殺し味方僅にして敵船
数艘乗捕屢勝利を得たり其余戰功抜群なるより秀吉公聞し
て感状を賜る（其文豊臣家譜太閤記に見へたり加増なりて十万石なりしを由文辞大同小異なり略之）
傳云志知城にて六万二千九百石なりしを加増なりて十万石にて
伊豫の松山の城に移封なりしも也豊太閤薨後慶長元和の役に軍功
多し寛永四年陸奥國會津若松城に移封し五十万石を領し同七年
九月十二日卒し行年六十九歳と聞也
安澄云加藤嘉明天正十三年志知城に来り所領一万八千石文禄二年伊豫松山に
移るといふ説なり又村老の説に天正十年に来り文禄三年に伊豫に移る
と云常磐草に天正十三年に来り慶長二年松山に移るといふ其故は
天正十一年柳が瀬合戰に嘉明先一番に此地に来る文禄
元年朝鮮に人数七百五十を出し當城より軍船を發し翌二年


加藤嘉明
朝鮮ニ渡リ
勇名ヲ震フ


秋月

和親の事ありて九月か帰朝に後五年を経て慶長二年二月再び朝鮮と征に時は高名ありて太閤より五月三日朝鮮陣中へ感状と賜ふ今度の功は仍て本知六万二千九百石の上へ三万七千百石加増下され十万石となる功ありよりて也云云

容信按云文禄の朝鮮攻に當城より出陣して翌年帰朝して柏山へ移り

しも知れぞ感状の文か依て領地六万二千九百石にて當城か居

りとせば脇坂氏も五万石か淵本は在城なれば當國の物成か

両家に行足らば若くは六万二千九百石多分は他國か領せられし藩翰

譜には天正十年の秋六万三千九百石か伊豫正木の城と賜りとあり又

船軍の事は太閤記か文禄二年二月の条に豊臣家譜は慶長二年の

春の条に脇坂氏の碑は七月七日の条に林道春の撰にて

斯異あれは覚束なし只大河内秀元か記か志に所応詳く彼日記は

自ら太田飛騨守一吉か隨ひ彼國か向ひて日毎の事を記せ所と慶長

二年の戦か一決せり此年三月十八日本朝の人太閤の仰を受て五月廿三日

より大坂を去て七月七日か釜山海か着同月十五日此戦加藤左馬介唐嶋

名のり

りしも也云云此文か見へ豊臣家譜の慶状の文五月三日とありと齟

齬に尚朝鮮征伐の軍記諸説區々にして年月の遠ひ又少からとも

も事繁くれば畧之嘉明移封の後三宅丹波守代官として志知城か

入又慶長六年石河紀伊守志知城の石壁を壊ちて感應堂の墨

を築しぞ

堀部宅地趾 右城趾の辺りは奥土居と云所にて加藤家の老臣堀部市左衛門長勝の住宅

或は大老柏木平馬助忠永の屋敷なりとも

太閤石 城趾の南の角にあり傳云秀吉公の腰掛石なり

徳永八幡宮 徳永村にあり別當宮積寺

例祭正月十五日と用也又十一月廿日神事あり

城之腰 又は城の本とも云同村の乾にあり古城趾城主姓詳なれ一説に志知野口氏の長臣

堀川和泉守某居住にとり

階出邸趾 同村にあり今畝号に階出と云一説は新村の城主冨永越前守の家臣階出九郎右衛門居宅の古趾と

志知組橋 志知の北村にあり松本河に架する土橋

光明寺　志知川村にあり亀島山と云浄土宗こ寺門に志知古城の時加藤家老臣堀部市左エ門営建の棟札近き頃まで有しかども門も朽札も失しなり

畠山尾張入道ト山終焉古趾

天文三年の春畠山ト山尚順紀州の野辺湯川と合戦し大に敗軍し終に為方なくして其場を遁れ船に乗て淡州へ落行あれども運命や尽果て幾程もなく重病と受ひ河内へも紀州へも立帰ることを可ずして淡路國光明寺と云所にて卜山禪門死去せらる行年五十五歳と聞へし此禪門に去る應仁文明の乱に大功を立られ故管領政長の一子にして代々公方の厚恩と蒙り家の繁昌他に超られば世の人望も軽からず智謀武勇の器量にして毎度大功を顕し實に公方家一方の権臣累代の管領なりしに共近年戦國にて衰運惟窮まるや他國に落魄して身を給ふ者云云

續應仁後記に見へたり

志知川　松本河の下流にあり海辺にあるを俗に志知川浦と云又淡津井ホと隔て阿邦賀の山王權現社　志知川の傍にあり

幡多郷遺趾　今郷廃して上八太村下八太村の名のこれり一説に云て上八太村に崇氏の居所なりとあり郷名とあるにあやまり云

和名類聚抄曰淡路國三原郡幡多　波多

神本八幡宮　下八太村にあり例祭正月十六日八月十五日　社僧神本寺これを守護す

神本驛古蹟　同村の中にあり神本と云る所あり是其古名の遺るものか

續日本紀曰高野天皇神護景雲二年三月南海道使治部少輔従五位下高向朝臣家主言淡路國神本驛家行程殊遠乞従停却詔許之

按往昔は大野驛より神本驛に國府摂州市村と経て福良の駅に行しあり然るに此神本は大野福良の間にあり行程近く畢竟無益なり停られしなるべし　常磐草

自駅盧嶋　同村にあり圓行寺川の傍なる田圃の中にあり小丘なり

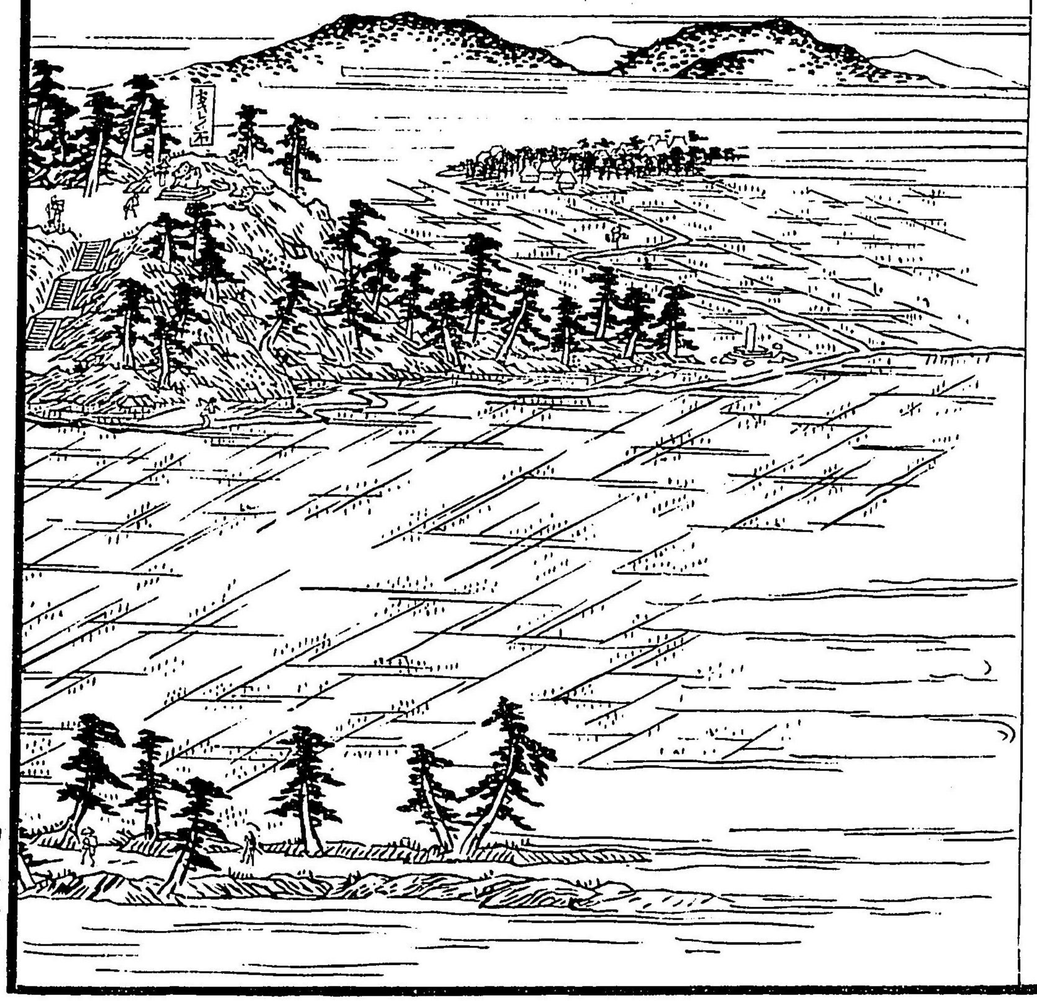
自凝島神社　山の頂上にあり伊弉諾伊弉冊の二神を祭る例祭正月十日六月八日十月二日の夜　毎年十一月二日寅一天

鶺鴒石　同本社の前にあり此所に於て毎年大穀ふるとて修行に俗に云ふと云

おのころじま
自凝島
ぜきまいし
鶺鴒石

海原のおのころ
じまのなりそれて
我とへらさの
御代ぞ久しき
師光

淡路島
あぢまさの
しるも
嵐をろ
おのころ
しまふ
まや立ちむ
土麻呂



二神の
ふるところ
あかりそし
まろうみ
淡路島
ろも
大平

二神探碧海
一滴瓊矛凝
倏忽生茲土
曦々日月昇
真幽蘭女史

右大穀祭ハ十一月二日寅の一天に修行す先庭燎を焚き兼て土俵二俵を製す
縄たゞ一筋にてからげ二俵と繋ぎ合せ白幣長三尺八寸丸なるを廿六本
かはらの三方に立又土器三十六に時の菓子鏡餅清酒を盛て備ふ又生穀少しを
一器に盛白飯三器燈明一對を供す尓しく神事祭式いと嚴なり真野氏これを
司るといふ且又六月八日を夏祭と称す真野氏が詞に云

みなづき八日の日の夕つかたより宮司らつどひよつどひて神事とりおこなへり
ものが事なくて日くるゝほど松の木のまにまに火ともせば影の浮橋の芦原の辺りまで
つらなりておもしろくなん見ゆる其ほか螢の飛かふおとまぎらしくも涼し木々の
下枝よりなびきて落るしづくさへ光りありてあはれなる心をかくしらるゝぞ

諸人のひき折りせらるゝふし拝むあはれなる神居まじしも　真野桂子

神代よりちよろづ國とてしるなかれのひらぬといふ日のうげ　仝

二神のかみの恵もあならむしぬのころじ波のちりぬ思へば　仝 美濃子

天の戸の押あけがたに見そなはせばのころじぬは霧み初めり　福褒山 蔦本

一度ありて滴る山の幾千代ぞ　嘯山

霜さびぬ鋼をかくの自凝じな　三千風

幡多川　八木川入田川の下流上八太にいたり松田を経て掃守河に入

岩淵　同幡多川にあり奇石多く岩上の岩穴に役行者の石像を安す

行者が原　岩淵の傍にあり

阿波井明神社　行者が原の上の方にあり

八幡宮　同傍の山上にあり社僧岩淵寺守護す境内の石に古めかしき文を彫付しものあり

阿吽石　同山中にあり此山の絶頂より四面の眺望ことなる美観なり又此辺より鉄石いづるト云　當山八古城の趾のよし未詳

岩淵寺　同村河の西にあり真言宗八幡宮の社僧也むかしは岩淵の辺りにありしと云傳ふ

社僧 延壽院　同山内にあり　當府修験の僧守之

大和國魂神社　同村八太山にあり二の宮と称す延喜式に出　国君より殿舎を営建ありて大和社ともいふ

延喜式曰　淡路國三原郡大和國魂神社 名神大
大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座あの社と同神なりと云
神名帳頭注曰大和社者大國魂大歳須沼比賣三座とあり
文德實録曰仁壽元年十二月壬寅詔以淡路國大和大國魂神
列於官社

延喜式上稅上曰淡路國大和大國魂神祭料八百束

同　名神祭二百八十五座大和大國魂神一座

淡路國　座別云云

什寶古銅印　其文曰大和社印

○近世神社の境内より堀出せる所とぞ全燒爛れ〳〵字章も損ぞ且柴氏の古銅印の記より左の字〳〵出れ尤印の寸法制度と合ざると難ぶ然れども按ずに火ふかく〳〵燒縮ませるものゝ又亦ゆゑ〳〵古銅印の寸法二寸のゝゑ〳〵大小ゆゑ〳〵集古十種の印章の部と見て知べし

古銅印一顆文曰大和社印淡州三原郡上八太邑二宮別當延壽院所藏也往時神祠二宇東西相對以祀伊特諾伊特冊二神故称二宮他猶有觀音藥師等堂及本院一子院七本院即延壽院八十年前羅火災神祠佛堂時蕩然尒後不能復舊今之所有二神與大和國魂神共一宇而奉之他唯觀音堂及本院耳此印古昔朝廷所預回祿之時失所在後掘而得其山中頒之年月則不可知是寺僧所傳之說也二宮者非二神之謂其實大和社當時對一宮而呼故有是名耳是常磐章之說也按延喜式載淡路國三原郡大和國魂神一座即此社是也後世因二宮之名遂祀諾冊二神以應之又浮屠所據加以觀音等像以為香火之場先王正祀隱晦幾亡猶賴印之存證據的確足正因襲之訛於千載之後則一塊之剥蝕安可不寶愛而珎惜哉又按公式令載印制度云諸國印方二寸今此印方一寸有七分與令不合豈古今尺度長短不同而然耶抑寺社印別有制度邪若未有之則無不載之理詳此印字揉扑拙决非千年内之物則出大寶以前之制於今有所不合亦不可知姑書以俟博雅之君子

やまとのじんしや 大和神社

文政十三年庚寅夏國學教官柴外東白記

長田溪　長田村に有り旧長谷の轉文にて一村中卯辰より酉戌に亦る二水長く一村の中央を経て西の境に亦る〳〵流川原村に出委文川と合流す

長田八幡宮　長田村に有り當村の生土神と例祭正八月の両月十五日と用ゐ又十一月十三日亦る神事有り別當観音寺

観音寺　同村に有り慈雲山光明院と号す八幡宮の別當にて真言宗

本尊　正観音　長二尺許　作不知　脇士　愛染明王　長五寸許坐像　弘法大師作　此尊像いふ〳〵田圃の中より掘出す處有りとぞ　薬師堂　本堂の左向に亦の傍に有り薬王佛と安す　長八寸許立像　行基作

大師堂辨天祠亦有り享保年間當村名草川原より不動の板木一枚を掘出す長三尺三寸幅一尺三寸厚一寸餘尊躰二尺許有り前年新別所密門大徳此像を鑑て高祖大師の作と云先年村民會構の事有りて此像を床に祭れ〳〵が其夜此に臥るに遠慮有り〳〵尊像の方へ足をひけて臥る然るに深更に及び目覚て見るに容の方へ頭をひけて臥居るかと〳〵程に外両三人の形勢を試るに果て悉く頭をかゝるて同じ衆人奇異の思ひをなす是より大に信心俗に枕返しの不動とぞ称するを画法彫刻等精妙〳〵全く兆殿司の画る所なりとも言へり

黒目が瀧　板が谷より西の方北向の谷口に小流有り〳〵則陵街道の傍有り往昔に瀧の高さ一丈余有る不動堂傍に有りと云今瀧は堂宇も朽失て〳〵里俗の云へる此地に妖怪出て住来を惑す〳〵と云今も里人の諺に黒目が瀧の黒坊主と云事を云へりとぞ

數川　同村亥子の方に有り里俗云文明年中庄田の城主埋め有り今も地中に有まゝ蛇骨と云

寛文年中方二尺許の蛇骨を掘出し州府の官所に献ずと云

感應寺古蹟　土井村に有り村の巽の方長田村廣田宮村の境に亦る〳〵高き丘山有り里俗感應寺山又松帆山と云頂上より東の方一段低き所に礎石と存れ平地凡三十間四方許古津路村感應寺の縁起に永正五年火災の時同寺の宝像抱夫て此山に留り〳〵火鎮まり〳〵後感應堂に飛び飛り来る又一説に此山より古津路へ移り〳〵と云其旧縁に依て感應寺を住勢も有る僧に為れ拝請する事恒例有りと聞也　當土井村の旧号を助吉村と云

大歳社　同村に有り社僧平等寺例祭　白山權現祠　同村山中に有り鳥井の傍に庚申塚有り　社僧平等寺

八月十日相撲會有り

飯盛が隈　同村に有り山の かゝる を以て名と云山の谷の東に北へ突出して長田村の境に亦る峰の古松に里俗病氣の本服を祈る必ず霊験有り又村の中央より中の方に亦る峰の古松に里俗病氣の本服を祈る必ず霊験有り其祈願の時千筋の矢を製して献る是古傳有りべけれども辨知も為りのなし

或説に飯盛の字章に射森為べし其謂に是より丑の方三町餘を去る

山裾ニ居廓と構ふハ庄田村古城主船越定氏の世臣歩卒将椚田氏某の宅あり定氏ハ射と善し専ニ遠近ニ遊猟ありしが或日椚田某も隨從し此森ニ山猟あり其日椚田の家屋敷を新造して上棟の式を行へり其光景眼下ニ見へしハ定氏傍ニ對ひ彼上棟の家屋敷ハ誰家ぞやと問ふ椚田某供奉せしハ僕が家なりと答へしに定氏完爾として然らば幸ひ悪魔降伏の為一箭射るべきのみ命有ふより工匠傭夫等を退け申べしと言も果ざるに早箭とづひく発つるがごとく其矢則ち彼棟木と射貫くこと疑れ字章ハ必らず射表あるべしと云其鏃ハ中世國君ニ呈上せしと云又椚田氏の居住の地ハ當村の中央ニあり故ニ畝号ニよび且其苗裔今猶これ住ス往昔船越定氏が射貫ぬかれし棟木後年ニ至り[illegible]ふより中世新ニ棟木を副ふる新あるを上ニ古き棟木を下ニ累ねしが折〻家ニ凶事あり卜者のいへり是ひとへニ棟木の逆ニなる故なるべしと斯有り程ニ棟木の上下を取かへ崇敬を篤くしたり

其後奇怪ハ止しかども此家ハ所謂鉞造の柱あるべし世俗神符と云称し乞て削り家の守とあがめり又此隣なる地の畝号を下馬屋舗と云屋舗あるどいふあり門前馬乗の往來を停め遺名あり椚田某の家ニ今猶弓一張と弦藏を始ニ張あり一張ハ庄田の八幡宮ニ奉納せ例祭的矢の式ニこれを用ゆ

犬塚 同村辰の方山添村の境ニあり山の上ニ数多石を積累ねり傳云船越氏遊猟の時それ矢[illegible]愛犬を射殺しかどもふりかけ葬るとい

大門古跡 同村ニあり方北間許畝号ニ大門と云傳云古領主の大門の跡ありとぞ此地の北ニ三室の薬師と称する小堂あり

厩之尾 同村杉尾谷出ざるの上廣き平地へ委文荘の領主藤原親秀永正年間これ居住て其後船越定氏駿州ニ来りて領主と立て其領分を奪ふと云

常滑 同村の中央川もとの地底より木の杙[illegible]如き色赤黒きもの昔より多く出て焚るに其性土ニ似て木ニ似ず古書ニ奥州燃る土と出ると云ハ是と同物なりと云里俗[illegible]称し或不灰木とも云阿州の[illegible]木氏書[illegible]云

土井村の溪底一里許の程ニ黒き木あり里人トコナメと云冬月水涸時是を採て貧民薪[illegible]少し臭し是と以て細工の根付ぞ[illegible]ふ[illegible]光澤あり一奇樹あり豫州の桑長州の船木等ニ同然也

定氏椚田が
上棟ゐ家固の
箭を射る

烏叫ひや
我りと犬の
ろろろ
香袖
春の月ゐ
遠山松の
ろろろ
素九
公左

道祖神祭　同村にあり正月十六日番あり頭屋と定めて其家より酒と製造し神に供し村中の農夫あの〳〵頭屋に集合し神酒とりてき合し里正某なる人とび八方より取る〳〵抱上る〳〵夫より新婦と〳〵の或い前年狂儀なりし者と其で〳〵ふもらと旧例に尚まと其日い他所より頭屋の辺りと往来もらる者ありれば是もかくのでくりるぶ故に他村のもの其日いあり〳〵と往来もらることをおそれ〳〵通行せざるとなり按ずるに幾内にい堂に上るとなりお祝ひ事の席まとあり〳〵古き例なりとなるべし尚考ふべし

安住寺　安住寺村にあり補陀落山宝蔵坊と号に真言宗

本尊　大日如來　銅佛の古作ゝ　薬師堂　本堂の向ふ左傍にあり瑠璃光佛と安に座像長二尺許古作ゝ

観音堂　本堂の向ふ門外にあり本尊千手観音と安に長二尺余利生山と号に廃東光寺の本尊なり

當尊観世音い往昔此村東光寺　往昔安住寺と本坊にて其余五坊あり東善坊東光坊東坊大門寺南坊ホゝ今あとゞく廃し農家の地となり

ホ安置もる所の古像あり然るに同寺廃亡の後あり転ぶ時に貞享の頃當像を偷去りのあり其往去と志ぶ余後不圖北方村西光寺ホ買求め尊信しくるふ寺僧病を発し或い怪異の夢と蒙るあり是正しく昊像の所為あるんとて野峰の大院ホ送りて譲れりさる程ホ又其寺の住僧の夢ホ告て曰我い淡州委文荘助吉村　土井村の旧名　東光寺の本尊也旧地ホ飯座せしむ

べしとのり是ホよりて急ぎ此事と知らせ来りなれば村民等續ひて野山ホ登て守護し飯ぎて別ホ堂宇と造建し安置ととと云ふ昊驗あり〳〵て信仰の老若糸詰間断あし則當州巡礼の札所ホ〳〵第十六番あり

千本塔婆綱異祭當村の中央路傍ある岨の上ある地の畝号と千本と云又其下ある平地とうつぎうと云此地ホ於て毎年千本塔婆綱祭と称して執行異例なり其式に云此村中ホ於て冠民なるもの十二三戸のり輪番あり毎年頭屋とうると定め正月十一日此家ホ壮容のもの集り稲藁まま長さ七尋半太さ二尺まりの大綱又長三尺ばりの綯十三垂と束ぶ大綱ホ七所注連の尾と垂らるでくり括ぎ樫の小枝一本充ホ狭き長さ二三尺の塔婆千本と刻み寺僧と頼り頭屋ホ請待も僧侶塔婆ホ呪文と書或い鎮符の文と書り板ホ彫り讀経しく寺ホ飯る其文に云

御祈禱之巻數

奉讀如意珠経一部

奉讀普門品三十三卷

奉讀般若經一百卷　奉念諸尊神咒各七遍

奉造卒塔婆一千本　奉建石之塔十三組

奉懸房華十三衜

右所祈者為金輪聖皇天長地久一天泰平四海

静謐風順時五穀成就

阿淡太守武運長久村中息災延命牛馬等除災

如意満足矣

淡州三原郡助吉村中謹言

年号月日

頭屋においてハ一統に酒宴を催し各輿に乗じてハ大綱の細縄をもつて大綱を持まハり往來の者に巻付或ハ若徒に違犯の事あれバ其家に到りて種々の悪戯をなし故に其日ハ他郷の者も是を恐れて此所を避て脇道を往来するとなり斜陽に至りてハ十三垂の細縄をえの如くに結付蛇の形に作りて里正の門前なる掠子樹に纏ひ置く（如此する事ハ例しあまし一年の間むなそ此木を綱の木と号く）扨又千本の卒塔婆ハ七束に括りて十三歳の童子に荷なはせ千本の地蔵尊の前に運び来て立ならべ村民等来つて回向し童子ハ皈るさに川辺にて小石を重ね塔を組上川の南向より互ひに水を划掛争論を鎮符に村号の助吉村を用ゆるハ古の遺風なりて此異例ハ古代よりの事と思はれたり然れども其傳説詳ならず（むかし此村に六坊の寺院ありし時ハ僧ども集り經供養を執行ひしも所謂委文の莊の大會にして此法會の料として田畝一反二畝を安住寺に寄附す其畝号を經免と云となり）

城腰耶趾　同村の南土井と庄田の村境にして臥竜山の北に並ぶ高峯の頂上一反ばかり北に一段の平地あり庄田土井を距ること西七町許或云船越氏の砦なりと一説に天文の比藤原親秀居住せし所領委文庄五千五百石船越定氏これを減じて知行を押領せしと云　寛政の初年此絶頂に小堂を立て地蔵尊を安ず

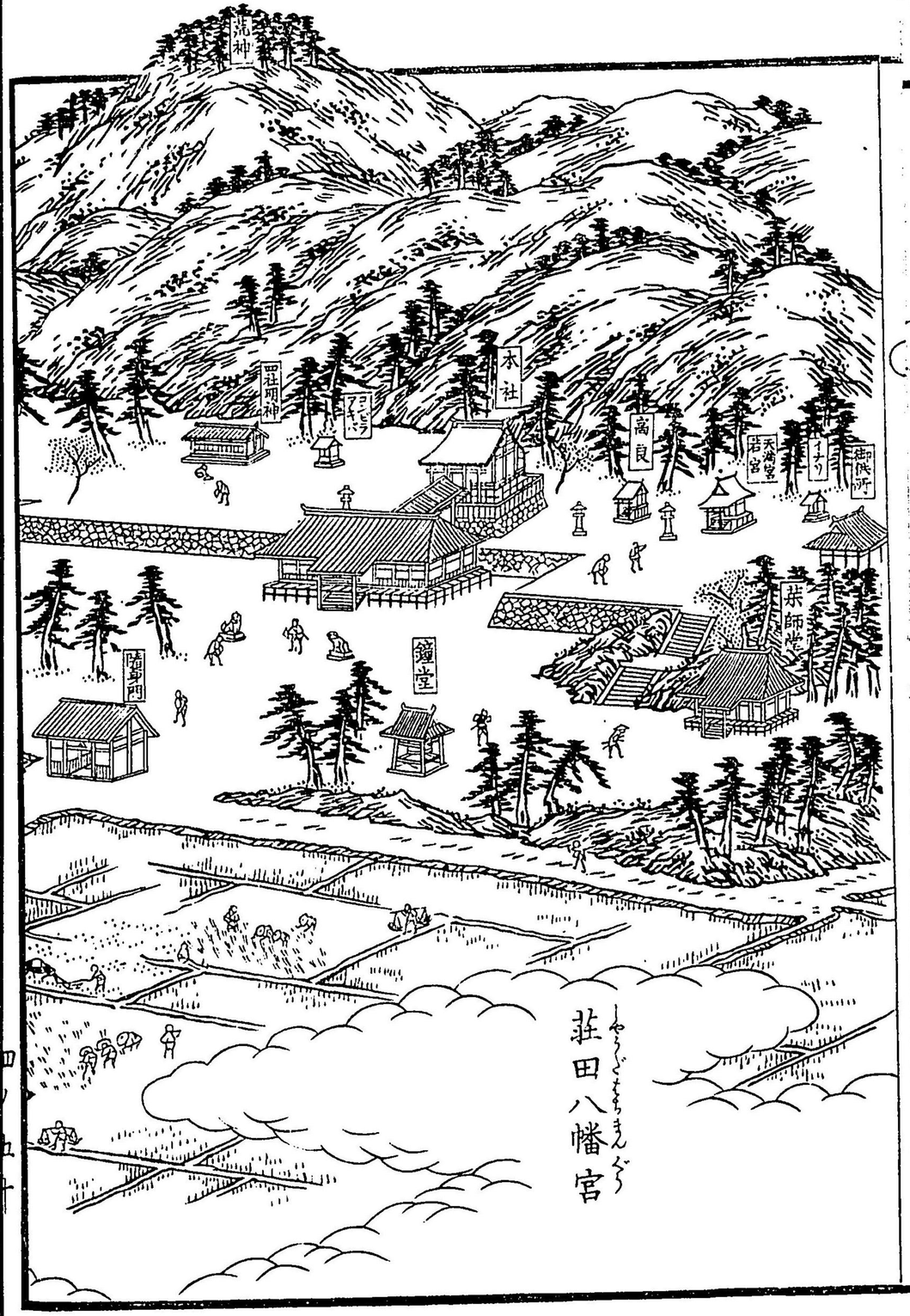
莊田八幡宮　庄田村にあり南方の山の方に委文の莊七村の生土神にして則神道村安住寺村土井村高村委文八村奥畑村庄田村なり例年正月十五日八月十五日十一月廿日別當平等寺神官弥宜ハ村中にあり

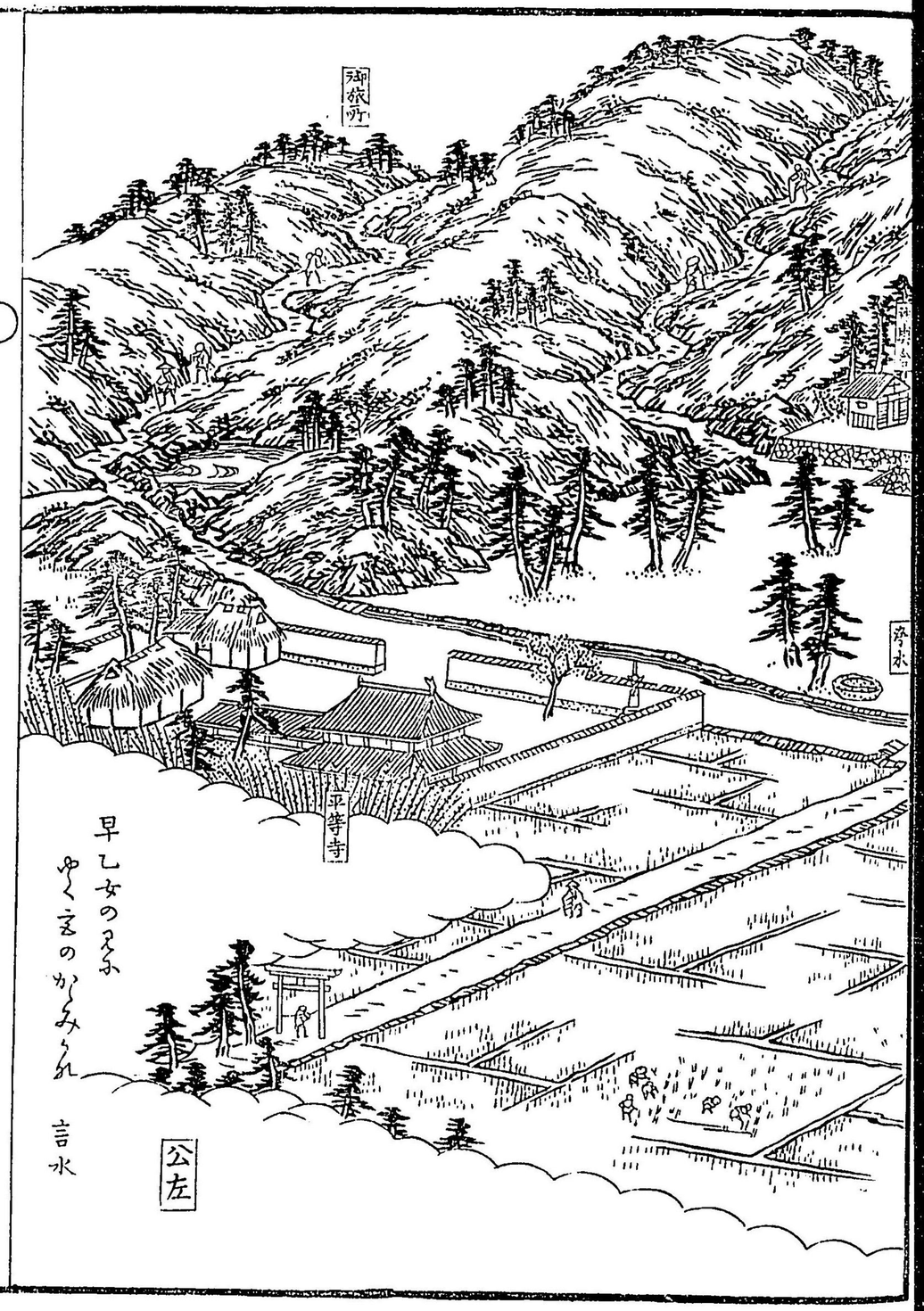
本社　應神天皇　**摂社**　高良社　若宮　天満宮　**末社**　金毘羅　秋葉　稲荷ホ　四社明神本社の左右にあり　**神輿藏**　本社の右の傍にあり

御供殿　本宮の右傍にあり　**薬師堂**　拜殿の西にあり薬王佛を安ず　不動明王　弐門天王　左右にあり　**鐘堂**　隨身門を入て右にあり天和二年十月廿七日鋳る所なり

石鳥居　正面の馬場にあり　元禄十一年十二月所建　**拜殿**　四間に七間瓦葺なりて至て古き造形にて傳云飛騨工匠の建る所なども拝してハ飛騨の国匠氏ホ諸国に渡りて寺社の普請を受取造りしこと此飛騨の工匠とよばれ一人あれど数ある事世人よく知る所なり

拾遺和哥集に　宮つくるひだのたくみの手斧ととあとしうちをも見しるね


荒神
四社明神
本社
高良
天満宮
居宮
御供所
師堂
鐘堂
荘田八幡宮


御旅所
平等寺
早乙女の
ゆく末の
かみなり
言水
公左

異稱日本傳曰飛騨國多匠民巧造宮殿寺院迄今稱飛騨工云云

當村の里正加地氏表德と弓羅と云天明の頃輯める所の誹書題して志都織と云其序文曰　上座の句と當社に奉納せり

因記委文八幡宮等事

倭文庄　倭は委に作る　倭の省字也　古より倭文布と織出せる名産ふかく名を得たる也レトリハシツリの畧訓　郷の庄田山に千木高きを一郷七村の人齊ひ祠まる八幡太神の宮居かゝ〳〵と〳〵飛騨の内匠が墨縄せゝとあん傳る拜殿あるど魏然と〳〵老樹の緑積ゞゞ〳〵奇妙の神境なりけり本社は西向あゝ乾の方五丁許の地ふ船越の旧邸ゆゝ北の丸山ふ鎮守天満宮の祠あゝ其東の岡に相悟寺觀宗寺の禪蹟遺る上は卧龍山也川端に加地石見ゞ故邸ゆゝ天文年中船越の類族加地左京之進六郎兵衛等當社と修覆〳〵輪奐更に新也境内ふ心王院平等寺あゝ〳〵祭禱の事と掌る丈明の頃船越左衛門尉定氏驍勇の誉ゆゝて同國慶野の原潛洲ゞ淵の大蛇と唯一箭に射留うと箙と叩ひ〳〵飯る

お為ち駿馬の跡と追〳〵委文の邸ふ来りうると定氏乙の箭ふ〳〵是と斃〳〵庶民の害と除き又其鳥の舌雁股の二鏃も神庫ふ寶藏〳〵大坂故城の遺士入交氏京師ふ携へ去る蛇骨は世ふ遺りゝ此家ふ有りと寛文七年又寶暦二年　國君へ奉る彼船越は東國の英士あると鎌倉の代見と撰〳〵委文の采地ふ居らゝんと也後船越五良右衛門尉景直ふ初て豊太閤ふ帰順し復　神祖ふ奉仕しとう今も幕下ふ爵禄し来世とゝ〳〵栄へ給へり予は即卧竜山の麓ふ世々其故邸と守りて墻塹の内ふ家居もとゞ此集も遠祖の敬神ふ勤めゝ廣前ふ納め奉るものかゝん云云

若宮社　同村葛ゞ谷の口ゆゝ仁德天王と称る　例祭正八の両月廿日と用ゐ

菅神社　山の谷ゆゝ御土居の裏あり菅公と祭る　例祭二八の両月廿五日と用ゐ

平等寺　八幡の境内ゆゝ明慶山心王院と号ゞ八幡の別當ゝ真言宗本る大日如来長一尺四寸許座像　什物ゝ大般若経の闕本ゆゝ奥書ふ康和二年と記と今嘉永三年迄七百五十一年ゝ及ぶ

船越氏邸蹟　村の西ゆゝ壕築墻の趾今ゝ存ゝ

船越氏は大職冠鎌足公の後胤清綱六世の孫船越右衛門尉維定正治二年正月梶原一族殺戮の時維定其族渋川兼定吉香次郎等と追戰〳〵駿州

狐が崎に於て誅されと誅に頼家其功を賞して采地と所々に賜ふ維定淡路國慶野庄委文を賜ふ世々委文を居城と依て委文の船越と稱ス爾後十代左衛門佐定氏文明三年古津路の毒蛇を退治し其身も又毒氣に中て死ス定可 彦之進十九歳 早世 定俊 左衛門佐と称ス出家して高野山に住し一花堂と称ス佛画に妙を得る然るに定可早世に付て還俗して家を継出家の名ハ實阿と号ス或云一花堂画く所の佛像一軸福井村大日堂に有ると云又北方村高和寺に金胎両部の曼陀羅有り云々

孫治郎景倫一子五郎右衛門尉景直ハ天正九年十一月秀吉炬口の城に入て景直と召れ御盃鞍置馬と賜ふ且曾祖父定氏が勇氣と称美して云々

或云船越氏ハ駿河國人なり委文荘を領して上方より下向して慶野の浦に着船して其浦人を郷導として委文の館を設け先領主と討果して自ら領地せしと云

常磐草按云文明中細川成春守護の時藤原親秀領主なりし感應堂の鐘銘に見へたり又永正年中の記に委文荘感應堂とあれば親秀ハ委文荘の領主なりし然るに親秀の子孫此荘に在て船越氏の為に滅ぼされしや船越氏ハ天文の頃と言ひ傳へ説もあれば三好家に属して委文の荘を掠奪せしや 三好ハ大永の頃より細川氏と戦ひ天文に阿波屋形養宜

の屋形なりし説一説に船越定氏ハ細川讃岐守成之に属ると云成之ハ武せり此時代のなりん乎

細川持常の姪なると持常養子なりし宮徳の頃の人と時代何の説是なりや知ず ト云

里老の傳説古書及び碎玉話金集談諸家深秘録故事因縁集に船越氏潜淵が池に大蛇を射ると何とも大同小異なり不審の所少なからず就中委文荘の内某傳る所の古書に云文明三年の頃定氏大蛇を誅伐せしと凡世に傳るごとし抑定氏が領分委文領の内慶野の邊潜淵に大蛇すみて人民牛馬を害し耕作をだに絶なんとし依て領内の農民訴て退治の事を乞ふ定氏なほ弓馬に名を得し人なりしが退治の心直ちに發起しまづ八幡の社前に一七日祈願をこめ稍て芦毛の馬に打乗り重藤の弓に矢をとりそへて携へて下僕を従へ潜淵の池に趣き堤を回ること再回水面をとりて白眼我領する地の人民を害し牛馬を損ふの正しき此池の妖怪と志れり速に現出べしと声をあげ呼ばりて此時長さ三尺ばかりの小蛇水上に浮び游ぎ廻るを定氏きつと目をとめ又もや高声に呼ばり云ふ人民牛馬を害ふは何ぞ其形を以て

ふうんぎ
船越が弓勢
えんじゃ
大蛇を射る

公左

せんや正躰と顕はせよと言も終らさるふ忽ち水上白浪起り四方曇り暴風諸木を吹倒さんとせし時は小蛇いつくにか隠れ去る池水激り逆ぎち〳〵その長凡壱尋餘の大蛇とあつて顕れ出紅の舌をひらめかし怒る眼は鏡を双べ如くあり定氏手早く矢を取つがひ持満て放つ箭ひやまくぶ大蛇が口ふ射込さる時ふ震動風雨もさるなじく乗馬さるひて溜得ざれば鞭を上て一散ふ駈りぐる下僕は馬の尾筒ふ取つき引去て俱ふ逃さるしが高村の山下まで下僕はもぞふ息絶さる大蛇はいまだ死もせざる猛て狂ひて追ひ来り櫟田村の大楠ふ纏ひ上りて定氏を行されと窺ひ尚も跡をぞ慕ひ来れり定氏は漸館まで有て容子を見るに既大蛇は門際まで来り終は屋上ふ登んとせし定氏二の矢を放つやいなや大蛇の咽喉深く中れば毒氣を吹ひ狂ひめぐりて死てより定氏此毒氣を中り久心地悩へ苦しみて二日ばかり亡せられぬ家嫡なる人毒蛇の骸を館の南の谷に埋む今の長田村の内数川といふ地あり後年此谷より大なる

蛇骨を堀出して　國君ふ獻ぜ（正保年間なりと云）則此骨は洲本の會館に藏をるぞ又下僕が馬の尾ふ取付て逃出しる所を小者の暇といふ（古津路村叙号ニ呼ぶ）則ち池より半町ばかり東なる又蛇淵といふは潛洲と別所ふ〳〵大蛇の尾まで地上を叩き苦しみ〳〵所といふ一説に大蛇の纏ひ登りて楠木は高村ふ有りしが此木も蛇毒ふ冒て枯ぬ今其楠木を取て松本村の潮清水の囲に楠樹の太さ六尺餘の此清水を俗ふ楠の井といふ

碎玉話に家臣納加地の両士主人ふ從ひ委文の池に到り余後俱ふ城内ふ皈り蛇毒の為ふ死せるよしと云へり其余尚異なる所少からず又金集談諸家深秘録故事因縁集等ふも船越氏當國潛洲が池ふ於て大蛇を射る事を載られども何れも大同小異ばかりにて是非を志らず

又船越定氏大蛇を射るところの鏃の圖も諸書ふ出て同じからず尤當時八幡の神庫ふは有ざれば何れを真圖とせんや分ちがたし

納氏第址　戒の社の南川もゝの上手三ゝ此辺ゝ納の氏姓と号とる家三所ゝ各農夫あり服坂侯在領の又納村ゝ羽風の古城蹟ゝ納氏居城の地あゝんか未詳あゝべゝ
又安住寺村ゝ納氏の末裔あゝ當時農士ゝゝ納某と云
又江府津田家ゝ納氏の末孫住ゝ白船越家の老臣あゝと云
太平記綱目ニ良忠大塔宮ゝ高氏の反心ゝる事を告ゝ曰同意の者多かゝむ
阿波ゝ小笠原一黨淡列ゝ島田藤田納古川等云云是を以ゝ按ゝ原來
納氏も名ゝる士あゝべゝ其後世いゝゝ有ゝん未詳あゝべゝ
加地氏故邸　則ち當村里正加地氏其の宅地あゝ東西四十八間南北五十九間午未向東より南へ堀の跡ゝ巾一間ゝ一間五六尺まゝ今時一段低く田畝とあゝ
天文年中加地石見同左京之進同六郎兵衛ゝどの名見へゝ船越以前ゝ居住ゝ
定氏居を當所ゝ構ふゝ加地氏も是ゝ屬ゝて家老とあゝとぞ　諸說ゝゝとゝぐゝもゝ繁れゝと畧ゝ
祇園社　八幡の社の西の丘三ゝ牛頭天皇を祭ゝ　荒神森　八幡のゝゝゝ山の肩ゝゝ
柏月の清水　社僧平等寺　荒神の小祠あゝ
荒神の表の東三ゝ田圃の用水ゝゝゝゝ清泉といふもゝゝれども池の辺ゝゝゝ
一尺一寸ゝゝの古碑あゝゝ松月の二字見へゝゝ其故詳あゝべゝ

淡路國名所圖會四之卷終

編者　浪華　曉鐘成

畫師　仝　松川半山

浦川公佐

筆耕者　鎌田醉翁

雕刻者　青山富三郎

明治廿七年三月十五日印刷
仝　年三月廿五日發行

定價七十錢

著作者　故人　木村彌四郎

右相續者　大坂市西區土佐堀通五丁目三十三番屋敷　木村友松

發行兼印刷者　兵庫縣淡路國津名郡洲本町外通二百番地　福浦文藏

10
2
19

淡路國名所圖繪

19
19